

第149回総会速記録

平成18年10月2日

日本学術会議

平成18年10月2日

於・日本学術会議講堂

第149回総会速記録

(第1日)

日本学術会議

目 次

1、開会 午前10時04分	1
1、新会長選出	2
1、新会長就任挨拶	8
1、前会長退任挨拶	10
1、諸報告	
提1 補欠の会員候補者の承認について	
提2 日本学術会議細則の一部を改正する決定案について	
提3 「科学者の行動規範について（声明）」（案）について	13
1、外部評価結果及び年次報告書についての報告	24
1、事務連絡	29
1、自由討議	30
1、高市早苗内閣府特命担当大臣御挨拶	60
1、事務連絡	62
1、散会 午後5時24分	62

午前10時04分開会

○議長（大垣会長代行） おはようございます。

ただいま本日の出席会員が112名で、定足数105名に達しましたので、これより会議を開催させていただきます。

会長代行の大垣でございます。黒川会長が先月9月10日をもって70歳の誕生日を迎えられまして、定年により退職されたことにより、9月11日より本日新会長が選出されるまでの間、会長代行を務めております。どうぞ御協力のほどよろしくお願いたします。

それでは、本日の配付資料について、事務局の企画課長から説明いたします。

お願いします。

○會田企画課長 おはようございます。企画課長の會田でございます。

それでは、配付資料の確認をさせていただきたいと思ます。

皆様、資料はお持ちでございましょうか。資料は講堂入り口のビジョンボックスに用意しておりますが、資料をお持ちでない方は手を挙げてお知らせいただければと思ます。

それでは、資料について確認させていただきます。

まず最初に、資料1、日本学術会議第149回総会資料、印刷物で、厚いものでございます。次に、資料2、会長互選関係規定及び投票の際の動きという資料でございます。それから、資料3、4、5と提案でございまして、資料3は提案1、補欠の会員候補者の承認、資料4は提案2で、日本学術会議細則の一部を改正する決定案、資料5が提案3、科学者の行動規範（声明）でございます。資料6-1、新生日本学術会議1年目の活動報告、資料6-2、日本学術会議の活動に関する評価、資料7、ロバート・メイ卿の講演資料でございます。

その後ろに参考がございまして、参考1が第2次連携会員の発令状況等、参考2が日本学術会議第149回総会日程概要、参考3が第149回総会中の部会・委員会等の会場でございます。

その次に参考資料がございまして、1が日本学術会議組織概要、水色の資料でございます。2がサイエンスカフェの講師募集について、3がCDR、これは日本学術会議1年目の活動報告の附属物でございます。

以上でございますが、そろっておりますでしょうか。

もし不足の資料がございましたら、講堂付近、もしくは事務方のほうに御連絡いただければお持ちするようにしたいと思います。

以上でございます。

○議長 ありがとうございます。

それでは、本日の総会日程について簡単に御説明いたします。

これから 12 時までの間に予定されている議題ですが、まず新会長を選出いたします。次に、新会長から就任の御挨拶をいただき、引き続き黒川前会長より御退任の御挨拶をいただくことになっております。11 時 20 分ごろから制度運営担当の浅島副会長から諸報告及び今回の総会に諮られる提案事項説明と質疑がございます。11 時 40 分ごろには年次報告等検討分科会の瀬戸委員長から外部評価結果及び年次報告書について報告がございます。

12 時から昼休みとなりますが、幾つかの委員会が開催される予定でございます。

午後に入りまして、13 時 30 分から部会、15 時 30 分から再びこの講堂において総会として自由討議を行います。

なお、本日は、このたびの安倍内閣発足に伴い、科学技術政策担当の国務大臣に御就任されました高市早苗大臣が午後 5 時 15 分ごろにお見えになる予定になっております。大臣がお見えになりましたら、議論を終了して、御挨拶いただくこととしたいと思いますので、あらかじめ御了承ください。

総会終了後、17 時 30 分からは幹事会が開催されます。

以上ですが、何か御意見、御質問はございますか。

発言される場合には手を挙げ、私、議長から指名された後、所属の部と氏名をおっしゃってから発言をされるようお願いいたします。

マイクの使い方は、マイクの手前の銀色の大きいボタンを押していただきますと、マイクの口元が赤く点灯いたしますので、点灯しましたら御発言いただき、発言が終わりましたら再度ボタンを押していただき、赤いランプを消していただくようお願いいたします。

何か御意見、御質問ございますでしょうか。

新会長選出

○議長 ないようですので、会長互選を行いたいと思います。

互選手続については企画課長から説明をさせます。

○會田企画課長 それでは、説明させていただきます。

先ほどお配りしました資料の資料2の関係規定を随時御参照いただきたいと思います。

まずこれまでの経過を若干説明させていただきます。

今回の会長選挙に当たりましては、この4月の総会で改正されました日本学術会議細則等の規定に基づきまして手続が進められてきました。この総会に先立ちまして、会員の皆様からの候補者の推薦書の提出等を受けまして、会長候補者推薦委員会で選定された8名の候補者の中から日本学術会議細則等の規定に基づきましてあらかじめ郵送による投票を行いました。その結果、上位4名の方、浅島誠会員、金澤一郎会員、岸輝雄会員、広渡清吾会員の4名の方を本総会に提示させていただき、会員の皆様による投票を行っていただくことになったものです。

次に互選の方法でございますが、細則に規定されておりますとおり、総会に出席した会員により、提示された者のうち1名に投票することとなっております。

具体的な投票の方法につきましては、同じく細則に規定されておりますが、投票は単記無記名によることとなっております。したがって、お名前を書かれる際に、正面のスクリーンに表示される会長候補者4名の中からお手元の投票用紙にお1人だけのお名前を書いていただくこととなります。2人以上のお名前を記入されますと無効となりますので、御注意願います。

投票用紙は投票の都度係員が1枚ずつお配りいたします。

投票の際には、後ほど御説明いたしますが、お手元の青色の番号札1枚と記入された投票用紙をお持ちになり、投票箱のある前の方にお進みいただきます。そして、この壇上に置かれます投票箱に記入された投票用紙を入れていただきます。

投票の際、お席から投票箱までの順路につきましては、資料2の最後のページをごらんいただくようお願いいたします。また、係員の方も誘導させていただきます。

次に、当選者の決め方でございますが、第1回目の投票によりまして投票者数の過半数の票を得た者をもって当選者とする事となっております。仮に第1回投票で過半数を得た者がいない場合には上位2名で決選投票を行い、比較多数を得た方をもって当選者とする事となっております。

なお、決選投票を行うべき2名の方を選出する際、及び決選投票におきまして、それぞれの得票数が同数である場合は年長者をもって当選者とする事となっております。

最後に、会長の互選に関する幹事会決定により、投票の際の立会人を五十音順で最初の会員と最後の会員をもって充てさせていただくこととなっております。

簡単ですが、以上で会長の互選手続に関する説明を終わらせていただきます。

○議長 よろしいでしょうか。

投票に入ります前にあらかじめ会員の皆様方にお諮りし、確認をしておきたい事項が2点ございます。

第1点は、遅刻して来られた方の投票の件でございます。おくれて議場に来られた方につきましては、投票箱を閉鎖するまで投票を認めるということにしてよろしいでしょうか。

よろしいでしょうか。

それでは、異議ないものといたします。

第2点は、投票された票に疑問が生じた場合には立会人の御判断にお任せすることとしてよろしいでしょうか。

よろしいでしょうか。

異議ないものといたします。

それでは、以上のことを踏まえまして会長の互選を行います。

ただいまから投票用紙をお配りいたします。

[投票用紙配付]

○本田孔士会員（第2部） 議長、1つ質問があるんですけども……。

○議長 はい、どうぞ。

○本田孔士会員（第2部） 新しい会長の任期についてお伺いします。

これは黒川会長の残任期間なのか、ここに書いてあるように3年なのか。3年であると会員の任期とずれますけれど、どちらが優先するのでしょうか。

○議長 企画課長から説明いたします。

○會田企画課長 お答えさせていただきます。

黒川会長の残任期間ということでございます。

○議長 よろしいでしょうか。

それでは、投票用紙は届きましたでしょうか。届いていない方は手を挙げていただきたいと思えます。投票用紙が届いていらっしゃらない方、いらっしゃいますか。

よろしいですか。

箱が前にきまして、顔が見えなくなりました。座ったまま引き続きさせていただきます。

それでは、これから具体的な投票の方法について私から御説明いたします。

本日あらかじめお渡ししてございます小さなソフトケースの中に会員の番号が記入された5枚1組の青色の番号札が入っていると存じます。投票される際にはこの青色の番号札1枚と記入された投票用紙とを投票の都度各会員の方に壇上の方へお持ちいただきます。まず番号札をテーブルのわきにおります係員にお渡しいただき、続いて投票用紙を大きな投票箱の中に投票くださるようお願いいたします。

また、その際には、資料2の最後のページに図示してありますように、会場中央の2つの通路から正面の投票箱の方へお進みいただき、投票が済みましたら両側の壁際の通路からそれぞれ御自分の席の方へお戻りいただきます。

なお、投票の際、テーブルの手前が1段高くなっております。足元に十分御注意くださるようお願いいたします。同じ色のじゅうたんですので、お気をつけいただきます。

すべての会員の投票が終わりましたら、立会人の立ち会いのもと、事務局職員により番号札と投票用紙の数とを確認の上、開票が行われることとなります。

それでは、まず立会人2名を指名させていただきます。先ほど御説明させていただきました会長の互選に関する幹事会決定により、立会人には五十音順で最初の会員と最後の会員の2名を指名させていただきます。

まず、五十音順で最初の会員でございますが、欠席の方がいらっしゃいますので、何人か動きますが、秋田喜代美会員にお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。——どちらにいらっしゃいますか。お願いいたします。

それから、五十音順で最後の会員として渡邊誠会員にお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

御承諾いただいたということで、よろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは、これより投票に入ります。まず立会人の方から投票をお願いいたします。秋田喜代美会員、渡邊誠会員、前の方へお願いいたします。

番号札はテーブルのわきにおります係員にお渡しいただき、次に記入された投票用紙を投票箱に入れていただきます。

よろしいでしょうか。

[立会人投票]

○議長 それでは、前の方から、準備のできました方から順番に投票をお願いいたします。順路は中央の2つの通路から正面の投票箱の方へお進みいただき、投票が終わりましたら

両側の壁際の通路から御自分の席へお戻りいただきます。

それでは、お願いいたします。

〔投 票〕

○議長 皆様、投票はお済みでしょうか。

まだ投票されていない方はいらっしゃいませんか。

それでは、全員投票が終了したものと認め、ただいまをもちまして投票箱を閉鎖いたします。ありがとうございました。

それでは、開票を行います。しばらくお待ちください。

〔開 票〕

○議長 ただいま開票が終わりました。開票結果についてはただいま立会人の両会員の御確認をいただきました。

ただいまから企画課長が正規の投票結果の発表を行います。スクリーンの準備にしばらくお待ちください。

○會田企画課長 それでは、報告させていただきます。

投票総数 160 票。この投票総数は番号札の数と符合いたします。

それでは、各人別の投票を申し上げます。敬称は省略させていただきます。

第1位	金澤一郎	会員	58票
第2位	岸輝雄	会員	41票
第3位	広渡清吾	会員	39票
第4位	浅島誠	会員	22票

以上でございます。

○議長 第1回の投票結果はただいま企画課長から御報告申し上げましたとおりでございます。

投票総数が160票で、過半数が80票です。最も多い得票は金澤会員の58票でございますが、その得票数は過半数に達しておりませんので、細則第2条第4項第4号の規定により、上位の得票者の方による決選投票を行うこととなります。

投票は、第1回の投票における上位の得票者2名、すなわち金澤会員と岸会員のお2人ということになります。投票用紙には両会員のうちいずれかのお名前を御記入いただくこととなります。それ以外の方のお名前をお書きになりますと無効になりますので、御注意をお願いいたします。

なお、会長に推薦された方の得票数は事務局において記録に残すこととし、スクリーンの表示は消させていただきます。

それでは、投票用紙をお配りいたします。

〔投票用紙配付〕

○議長 投票用紙は届きましたでしょうか。届いていない方は手を挙げてください。

皆さん、お持ちでしょうか。

それでは、これより投票に入ります。

恐縮ですが、秋田会員、渡邊会員には立会人としてよろしく願いいたします。

それでは、立会人の両会員から決選投票をお願いいたします。

〔立会人投票〕

○議長 それでは、前の方から、準備のできました方から順番に投票をお願いいたします。

〔投票〕

○議長 皆様、投票はお済みでしょうか。まだ投票されていない方はいらっしゃいますでしょうか。

それでは、全員投票を終了したものと認め、ただいまをもちまして投票箱を閉鎖いたします。

それでは、開票に移ります。開票をお願いします。

〔開票〕

○議長 ただいま開票が終わりました。開票結果についてはただいま立会人の両会員の御確認をいただきました。ただいまから企画課長が正規の投票結果の発表を行います。

なお、投票結果については正面のスクリーンに表示いたします。スクリーン表示にちょっと時間がかかりますが、準備ができ次第、企画課長、投票結果の報告をお願いいたします。

○會田企画課長 それでは、決選投票の結果を報告させていただきます。

投票総数 162。このうち、白票が 2 票ございました。

各個人別には、

第 1 位 金 澤 一 郎 会 員 9 1 票

第 2 位 岸 輝 雄 会 員 6 9 票

以上のような結果でございます。(拍手)

○議長 ただいまの決選投票の結果、金澤一郎会員の得票数 91 票は岸輝雄会員の得票数

69 票を上回る結果となりました。

よって、日本学術会議の第 20 期会長には金澤一郎会員が選出されました。

立会人の秋田会員、渡邊会員、まことにありがとうございました。厚く御礼を申し上げます。

それでは、ここで議長を新たに選出されました会長と交代させていただきます。今まで御協力ありがとうございました。(拍手)

それでは、新会長、よろしく願いいたします。

〔議長交代〕

新会長就任挨拶

○金澤会長 ただいま選出いただきました金澤でございます。まことに光栄に存じますとともに、大変な責任を今感じておりまして、とても笑顔が出ない状況でございます。

今までの会長が大変能力のすぐれた会長でございまして、すべておんぶにだっこで済んでいたのですが、これからはどうもそうはいかないということがこの結果でわかったのでありまして、つまり今までの会長はとにかく、この意味（頭を指す）の脳力と、体力と、そして魅力をお持ちでございました。この 3 つの力というのはなかなか 1 人に備えることはないのですが、まれな人物でございました。

その会長の後を受ける会長は大変だなと実は思っておりましたら、こんなことになってしまって、えらい目に遭ったと思って、人生が狂ったと思っておりますが、こうなった以上は全知全霊を尽くして皆さん方とともに頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞ御協力のほどお願い申し上げます。(拍手)

これは今初めて見るのですが、私の挨拶というのがあるんだな。

今のが挨拶になるかどうか分かりませんが、ちょっと一言、二言、座ったままで恐縮でございますが、お話をさせていただきたいと思っております。

学術会議は今非常に大事な時期にあるということは恐らく皆さん方も同じ思いではないかと思っております。特に連携会員がこの 8 月の終わりに 1990 名という中途半端な数字、これは 210 というこの会員の数に合ったものでございますので、お許し願いたいわけですが、結局 2200 名の会員プラス連携会員がやっとできたところでございます。つまり、仏像ができたわけでありまして、これに魂を入れないといけません。

この魂は何かということをございますけれども、恐らく皆さん方もいろいろお考えだと思えますけれども、私はやはり新しい変化の部分と、変化してはいけないであろう継続の部分と、この2つを備えた活動的な部分だろうと思えます。

変化ということに関しては、これはもうおわかりと思えます。外からの力をもって大きく変化したわけです。会員の選考方法も変わりましたし、定年もできましたし、いろいろなことが変化いたしました。

それでは、継続すべき点は何かということが大事なところだと思います。具体的なことはこれから皆さん方と御相談しながらいくわけであり思えますけれども、私の個人的な、しかし、どちらかという精神的な話を1つだけさせていただきたいと思うんですが、私は19期からお世話になっておりますが、当時の会長及びその前の会長でありました吉川先生たちのお話を伺っております、やはりキーワードは幾つかございますが、1つは、学術会議というのは御自分の専門とは違う立場で俯瞰的にものを見るという見方と、もう1つは、見返りを求めないボランティア精神ではないかと思っております。この2つをベースにして、皆さん方のお持ちの見識を存分に生かして議論をしていただいて、そしてそれを、黒川先生の口癖ですが、品のある提言として世に出していく。こういう4つぐらいのキーワードがあるのではないかと思います、これこそが継続すべき点なのではないかと私は理解しております。具体的な行動その他はこれから皆さん方とよく御相談しながら進めたいと思えますが、少なくとも心の中にはそういう4つのキーワードがいつも渦巻いているという状況であるといいなと思っております。

昔、ケネディ大統領が言ったと言われております名言の中に、アメリカがあなたに何をやってやるかではなくてという話がありますが、少し変えて考えますと、私たちはやはり学術会議が自分に何をしてくれるかとか、あるいは学術会議がしかじかのことをやれと言ったからやるということではなくて、皆さん方の中から自分はこういうことを学術会議のためにやるんだという御提案をいただいて、そして進んでいくべきなのではないかと思っております。このことは学術会議のためだけではなくて、それは当然ながら日本全体の科学者のためにもなり、また極端に言えば世界の人類のためになるのだと信じて行動することではないかと思っております。

大変かっこいいことを言えますけれども、それに向けて少なくとも皆さん方がお進みになるそれをお助けする立場なのだろうと思っておりますので、どうぞ御協力のほどお願い申し上げます。

前会長退任挨拶

○議長（金澤会長） それでは、予定より 10 分ほど早いようでありますけれども、黒川前会長がお見えになっているようですので、御退任の御挨拶をいただきたいということでございます。

黒川先生は、第 19 期、20 期の 2 期にわたりまして、平成 15 年 7 月から本年 9 月までの約 3 年にわたりまして日本学術会議の会長をお務めになりました。

それでは、懐かしい顔が見えております。黒川先生、どうぞよろしくお願いいたします。

○黒川前会長 先生方、お久しぶりです。

本当に新生学術会議と言われて、思い出せばちょうど 1 年前ですね。10 月 3 日だったと思えますけれども、皆さんと初めてお会いして、すごく顔ぶれがフレッシュになって、私も非常に緊張して、20%の女性の会員とか、いろんなことがありましたけれども、三田の会議所で夕方からレセプションがされ、官房長官も来られ、総理も来られてというような話で本当に楽しい 1 年間を過ごさせていただきました。ありがとうございます。

この 1 年、新しい連携会員とか、18 期で物すごく危機的な状況かなというので、吉川先生以下相当な海外の調査を行い、相当な時間をかけて報告書をつくり、どのようにしていくかという話を随分総合科学技術会議とも議論いたしましたけれども、今のような格好になり、最終的には 2 年前、だったかな、3 年前の 2 月に閣議決定がされ、国の機関として残り、内閣府に移りというような話があったわけですが、まだまだこれは出だしだけだったと思います。本当に先生方のおかげでこの 1 年間何となく無事に過ごさせていただきました、お手元にあるような、ちょうど 1 年たった報告書というのがありまして、今までの報告書と違って、企画委員会の先生方に随分手伝っていただきまして、比較的に見やすい、しかも絵の多い報告書ができておりまして、さらにこれをもっと簡単にして、もうちょっと、普通の人が見ると、あ、こんなことをやっているところなのかなということがわかるような広報の冊子にさせていただければと思っております。ここに全部書いてありますので、主なハイライトといいますか、本当に皆様のおかげでここまでこれたと思います。

そういう意味では、先生方が、いろんなところが法人化されたり、今大変な重職についておられる方が多く、さらに会員になったばかりの猪口会員が——奥様の方ですけれども、大臣になられたりして、本当にそういう意味では学術会議の外に対するインパクトがあり

まして、おかげさまで学術会議はこの1年間でどうだったのかなというのが、私たちが言うのは変ですけれども、外でどういうふうに思われているかという話がこれからもぜひ持続させていただければと思っております。

この報告書にいろいろ書いてありますので、私は本当に先生方に心からといいますか、先生方、お忙しい中でいろんな形での支援に心から感謝したいと思っております。

きょうはお手元に配った2枚の紙は、たまたま最近ですが、子供の理科離れとか科学離れとかいろいろなことがあります、「光と感動、そして芸術と科学」とか、そんなことも書かせていただきましたので、これはラマン効果のラマンがどうして光に感動して、インドで教育を受けて、インドでずっとやっていた人ですが、ノーベル賞をもらうようになったかといういきさつと、それからロダンとカリエールの2人の芸術家ですね。彫刻家と絵をかくカリエール、この2人がすごく仲がいいわけですが、この2人がどのようにして光に感動したのかということから、それぞれデリバリーするものは違い、光に私たちはよく感動するわけですが、子供からの気持ちが光の正体は何なのかということを生懸命考えて解析したラマンであり、それから光の一瞬一瞬に動いていく——ロダンのかいたものとか、ロダンのミュージアムに行くと感じるわけですが、ロダンのかいたものなどを見ると、光で一瞬一瞬に物が動いていくのをどのようにそれをとらえて、形にあらわしたいというのが彼の1つの努力であったわけだし、ロダンとずうっと一緒に、一番精神的に価値を分かち合えたというのがカリエールですけれども、カリエールも光に感動する家族、特に自分の家族を対象にしている絵が多いわけですが、その一瞬一瞬をどうやってその絵にあらわそうかということをやっていたわけなので、感動する心、気持ちというものをどうやってあらわすかは人によって違いますけれども、それが1つのきっかけになっていくのではないかという話を書かせていただいたわけです。

そのような温かい気持ちというか、物に感動する気持ちというのがやはりサイエンスをするにしても、学問をするにしても一番のもとにあるはずで、そのようなこと自身を周りの大人が常に持っていなければ、子供の科学離れというのは大人の科学離れではないかという話を書かせていただきましたので、たまたま1週間ぐらい前に「日経サイエンス」にこれが出ましたので、お手元にお渡しさせていただきました。ちょっと僭越ですけれども、たまたまことしの春にカリエールとロダンが一緒になった展示が西洋美術館であったので、私、行こう行こうと思っていたのですが、とうとう行く機会をなくしてしまいましたけれども、そういう感動的なことがあったので、ちょっとこれを書かせていただいたのが1つ。

それからもう1つ、今、科学者の不正行為というのがいろいろ問題になっていますが、この間も総合科学技術会議で1時間、科学者の不正行為というのは、不正行為と間違いというのは別で、ガリレオなんて400年前にとんでもないことを言ったわけですが、それは間違いだったわけではなく、そのときは間違いだと思っているわけですが、常に間違いと思われているテーゼに対して新しい人たちがチャレンジしていくというのがサイエンスを常に進めているわけですので、間違いと不正行為を間違えないようにという話を書かせていただいているわけですが、そういう発言は学術会議がずっと今までやっておりますので、今回の阪大の助手が論文をウィズドローしたことによって死体として発見されたという事件がありまして、9月の初めに報道されたわけですが、私はちょうど9月は6日からずうっと1週間、北海道、京都とこちらのやっている会議で出ておりまして、その後、またすぐにジュネーブに行っていたものですから、そこで電話の取材を受けたのですけれども、やはりそういうことがあると学術会議のだれかに話を聞いてみようという話になってきているのはすごくいい動きではないだろうかと思います。

たまたま「ネイチャー」に出たのですが、日本の新聞でどのぐらい書いてあるかわかりませんが、ここにいる柳田先生のブログにはたくさん書いてあるんですね。柳田先生や大隈先生とかたくさんの方がブログにいろんな情報を発信されているのですが、これも私がいろんなコメントしたところが一番最後に書いてありまして、そういう意味では学術会議を代表するような人、あるいは学術会議の方々にこういう取材がくるというのはかなり世の中が動いてきているのではないかなという感じがしたので、ここに出させていただきます。

そんなことで、私は何も御挨拶というよりは、私が皆さんにきょうの機会をとらえてむしろお礼を一言申し上げたいということで、ここに実は何か言い残してはいけないと思って書いておいたのは、今ちょっと金澤さんも言われましたけれど、一人一人が、私、何回も言っているように、学術会議はそれほど日本ではまだ知られていないかもしれないけれども、先生方はお忙しい中で少しずつ学術会議でどういうことをするのかということや、だんだん理解されている科学者の中で一番理解されている方たちですので、先生方の周りで、あるいは日常生活の中で、あるいは研究のプロセスで、あるいは教育のプロセスで、あるいはお友達の中で、学術会議というのはどういうことをしているところなんだよ、こういうところなんだという話と、こういう課題を抱えているということをぜひ学術会議のアンバサダーとして広報を一人一人担うというむしろ外向きの行動をぜひやっていただき

たいと思いますし、もう1つは、金澤さんがおっしゃったように、私もここに書いておいたのですが、ケネディ大統領はたった2年ちょっとしか大統領をしませんでしたけれども、同じように学術会議で私たちに何かいいことがあるのなんて決してそんなことは思わずに、一人一人が学術会議という機構を理解されて、外に発信するとともに、学術会議という機構を通して科学者コミュニティー全体が日本の社会ばかりではなく、海外の社会においてもぜひそういう科学者コミュニティーの全体の信頼が上がるようなことをすたるためには何ができるのかと、この機構をどのように使っていけばいいか、どのように寄与させていけばいいかということをごをぜひ考えて、また新会長のもとに皆様方ぜひ連携会員の方々にもそういうことの理解を広げていただければ大変これはすばらしいオーガニゼーションとして日本の科学者コミュニティー全体がいかに社会に信頼され、ホームページにも出しておきましたけれども、学・アカデミアの信頼の構築ということの1つの大きなミッションに私どもが次の世代へ、また今の科学者コミュニティー全体にいいメッセージを発し、社会に対しても認知されていくような科学者コミュニティーを構築していく少しの小さなステップかもしれませんが、ぜひそのようなことをやっていただければ、この1年間一緒に仕事をさせていただいていた私としても、また皆さんとしても本当にすばらしい将来が開けてくるのではないだろうかと思ひ、本当に1年間ありがとうございました。

何となく本当に感慨深くて、お名残惜しいと言つてはおかしいけれど、別にやめちゃつて、存在しなくなるわけではありませぬので、いろいろな形で応援させていただきたいと思つておりますので、この1年間の新しい学術会議に皆さんのお力添えと一緒に仕事をさせていただきまして本当にありがとうございました。心から感謝しております。ありがとうございました。(拍手)

○議長 黒川先生、どうもありがとうございました。

諸報告

提1 補欠の会員候補者の承認について

提2 日本学術会議細則の一部を改正する決定案について

提3 「科学者の行動規範について(声明)」(案)について

○議長 それでは、新しい学術会議の発足でございます。

最初になりますが、諸報告、提案事項の説明だそうでございます、提案事項は3つご

ございます。1つは、補欠の会員候補者の承認でございます。2番目が、日本学術会議細則の一部を改正する決定案でございます。3つ目が、科学者の行動規範（声明）であります。

それでは、概要につきまして、制度運営担当の浅島副会長から御説明願いたいと思いますので、よろしくお願いします。

○浅島副会長 それでは、提案をさせていただきます。

実は私はあしたまでの副会長でございますので、きょうは今までの続きということで副会長の役でもってこの提案をさせていただきます。

総会の資料3を見ていただきたいのですが、補欠会員の候補者の承認でありまして、これは提案理由は、日本学術会議会則、平成17年10月24日の日本学術会議規則第3号で、第8条第3項の規定に基づき、補欠の会員候補者を内閣総理大臣に推薦することにつき、総会の承認を得る必要があるためでございます。

これは今お話のありました黒川前会長が会員でなくなったわけでございます。そうすると、その後の会員210名を埋めるために1名を補充しなければならないということでございます。そのためにはいろいろな手続がありまして、少し申し上げますと、まず選考委員会というのが行われまして、これは3月、5月、6月であります。そして、6月22日に幹事会がありまして、幹事会のときに補欠の会員の選考手順について——これは幹事会の申合わせでありますけれども——の決定を行いまして、補欠の会員候補者を推薦する部を第2部とすることを決定いたしました。そして、6月23日に会長より第2部長あてに補欠の会員の候補者の推薦依頼がありまして、2部における検討を行いました。そして、8月28日に推薦の期限がありまして、9月4日に選考委員会を行いまして、補欠会員の候補者名簿、順位付を決定いたしました。そして、9月21日に幹事会を行いまして、補欠会員の候補者1名を選定いたしましたわけであります。そして、本日の総会にお諮りする次第でございます。

補欠の会員の候補者は幹事会でもって一応候補者になってはいますけれども、この総会で認めるということが規則にありますので、そのことについてお諮り申し上げます。

補欠会員の候補者は日比紀文先生でございます。59歳でありまして、臨床医学の専門分野であります。現職は、慶應義塾大学医学部消化器内科教授でありまして、日本学術会議の連携会員でございます。

推薦理由は、厚生労働省「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究班」の主任研究者で、日本消化器病学会の常任理事も務める日比教授は、消化管免疫学並びに炎症性腸疾患の診

療に関して最も欧米に認められている第一人者であるという推薦理由が述べられております。

補欠の会員の任期は平成 20 年 9 月 20 日ということになっておりますので、今のような経過と提案理由でございますので、日比会員を補欠会員として正式にお認めいただきたいという提案でございます。

よろしく願いいたします。

○議長 ありがとうございます。

ただいまの御提案、あるいは御説明に対しまして何か御質問ございますでしょうか。

よろしいですか。

ありがとうございます。

それでは、次の御提案をお願いいたします。

○浅島副会長 それでは、提案 2 の説明を資料 4 に基づきまして行いたいと思います。

提案は、日本学術会議の細則の一部を改正する決定案でございます。これは標記についてのものでありまして、提案理由は、「数学」と「数理科学」という言葉が指す学問領域の範囲について、研究者によって意見が異なり、確たる区別があるわけではない。一部の人は「数学」という名称を比較的狭くとらえ、数学とそれ以外の科学の接点に当たる部分を数理科学と呼ぶが、別の人たちは数学という名称を広くとり、両者を含めて数学と呼んでいます。

このようなことがありまして、これは名称の使い方の習慣の違いでありまして、学術的な意味があるわけではない。「数学」と「数理科学」の使い分けについて、日本学術会議の分野別委員会の名称として使うことにより、何らかの統一を行う意思はなく、またそれは名称変更の提案の趣旨ではありません。

「数理科学」という名称を「数学」より広いものにとらえる人たちは、広い意味で数学あるいは数理科学の専門家が多いため、数学委員会という名称では、これらの人の中で自分の専門領域が専門の分野別委員会に含まれないという誤解を生む可能性があります。一方、狭い意味の数学の専門家は、数学委員会・数理科学委員会のどちらの名称でも自身の専門がそこに入ると理解すると思われま。

第 19 期では、研究連絡委員会の名称は数学研究連絡委員会であったが、分野別委員会がカバーする範囲はより広いことから、数理科学の方が数学より分野別委員会の名前にふさわしい。

以上の理由によって、分野名「数学」を「数理科学」に変更することを提案するものでございます。

次のページに改正後と改正前のものがありますけれども、委員会名を「数学委員会」から「数理科学委員会」にしたいということでございます。

お諮りいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○議長 ありがとうございます。

ただいまの御提案に、あるいは御説明に御質問ございますでしょうか。

特に「数学」あるいは「数理科学」の関係の方々、よろしいでしょうか。

内容に関しては恐らく第3部を中心に部会で御議論いただくのだと思いますけれども、よろしいですか。

ありがとうございます。

それでは、第3の御提案に移ってください。

○浅島副会長 それでは、資料5に基づきまして提案3をお諮りいたしたいと思います。

行動規範（声明）についての案でございます。

提案者は、科学者の行動規範に関する検討委員会委員長です。

標記について、別紙のとおり声明として外部に公表することであります。

提案理由は、本委員会のこれまでの審議結果を別添のとおり取りまとめたので、これを外部に公表することをお諮りしたいということでございます。

次のページをめくっていただきますと、声明としてこのような文章でもって科学者の行動規範を出したいということでございます。

具体的には、1から2、現状及び問題点、提言の内容について（1）（2）（3）があります。そのようなものでございます。

そして、その中身について少し触れますと、めくっていただきますと、今回この科学者の行動規範に関する検討委員会の審議を行いました検討委員会の先生方の御氏名が書いてありますので、ごらんいただきたいと思っております。

そして、要旨は、次のページに背景とか問題点、声明の内容というものを書いてあります。

次のページにいきまして、目次がありまして、ここからがいわゆる本論に入るわけでございます。

「はじめに」ということでありまして、日本学術会議では、18期、19期でもって既に

かなり科学者のミスコンダクトについて対応を迫っており、報告書が既に出しております。それゆえ、いろいろな問題が起こったときに、新生日本学術会議はこの問題にいち早く課題別検討委員会をつくりまして、1年でもって今回声明を出すことまで皆さんの御協力をお願いしたいというものでございます。

3 ページのところは、「科学者の行動規範」でありまして、「科学者の行動規範」と書いてあるものです。これにつきましては、既に春の日本学術会議の総会で皆様方にお話しして、そしておおよその御了解は得ているものでございます。

これをもとにしまして、「科学者の行動規範」については、次のところの「科学者の責任」から始まりまして、ずっと下の 11 の「利益相反」まで、ほとんどのことについては大きな内容の変更はございません。

一部我々の委員会でもどこまで踏み込んで書くかということについてはありましたけれども、今回のミスコンダクトについては大きく言えば捏造・改ざん・盗作という、一番科学者としてやってはならない事柄について中心的に置きながら、なおかつ法人化後に今起こっている利益相反との問題、他者との関係というような問題についても触れているわけでございます。

それを5 ページのところに「科学者の行動規範の自律的実現を目指して」ということでありまして、この辺が実は今まで示してはいたのですけれども、なかなかこれとカップルして理解されなかったことがあります。科学者の行動規範のことだけが出てきまして、これをどのようにして実現していくかということについては必ずしも理解されなかったことがありましたので、今回はきちんと「科学者の行動規範の自律的実現を目指して」ということでもって示していこうというものでありまして、そこに書いてあるような「組織運営に当たる者の責任」等を含めまして、ずっと6 ページまで書いてあります。これももともとついてたものでありますけれども、セットにして出したいということでございます。

こういうようなことがあったということと同時に、この問題については、先ほど述べたように、黒川前会長のころから非常に詳しくいろいろ委員会でもって検討しておりました。それで、我々日本学術会議は科学者コミュニティに対していろいろなアンケートを行ったものでございます。アンケートについてはどういうアンケートを行ったかといいますと、例えば 14 ページのところでございます。参考4のところでありまして、「科学者の行動規範」等に関する調査」ということを行いました。

これを送ったところは、そこに書いてあるように、2819 機関に送りまして、1251 の大

学及び高等専門学校、272の研究機関で、1296の学術協力団体というふうなところに送っております。

そして、1332件の回答を得ておりまして、47%、約50%に近い回答率がありました。私は統計の専門ではございませんけれども、この種の回答率は極めて高いというふうに言われております。つまり、50%近い回答率でちゃんと答えてもらったということでございます。

その結果、いろいろな問題が見えてきました。あるところは、大学によっては、非常に言い方は悪いのですけれども、問題が起こっている大学ほど早く行動規範をつくっております。問題が起こっていないところはつくっていないというところがありますので、その辺についてこれから日本学術会議としてはどういうふうにしてオートノミーを持ったちゃんとした行動規範をつくってほしいということのメッセージを出していくことが必要であると思っております。

最近このようなことが起こりまして、単に日本学術会議がある面ではいろいろな意味でこの問題についてはリードしていったわけでありましてけれども、その後、文部科学省、あるいはJSPS、日本学術振興会、あるいは各大学等、あるいは研究所等においても行動規範というものが次々につくられてきております。

1つお考えいただきたいのは、我々日本学術会議の場合は、日本の学問をいかによくしていくかということと、事故が起こったときにどういうことをすればいいかということをおおまかに科学者の、ある意味で言うと性善説に立っております。ところが、ファウンドエージェンシーのつくっているものを見ますと、性悪説に立っているようなところがあります。それは我々としては困るところがありますので、その辺について、本当に若い次の世代が伸び伸びと研究をし、なおかついろいろな意味で学問を伸ばしていくということの規定についてどのようにして述べていくかということもまた学術会議としての1つの責任ということもあると思います。

それはどういうことかといいますと、いろいろな意味で改変はされました。かなり意見を皆さんが述べていただきましたので、改変されましたけれども、オーサーシップの問題とか、あるいは資源の配分の問題とか、あるいはこれからの外国とのいろいろな意味での共同研究をやる上でのいろいろな問題というものがそこで指摘されております。それから、研究費の停止期間とか、そういうことについてもだれが本当に責任をとられるのか、あるいはとるのかというような事柄についても、ある面で言うときめ細かく決められている

ことがあります。

学術会議はむしろそういう科学者のコミュニティーの問題をできるだけ研究しやすい状態にするにはどうしたらいいかということをもろろ考えていくということと、そういうことを黒川前会長、あるいは新会長の金澤先生が言われたように、国民から信頼される学問とはどういうことかということはこの長い文章の中で書いてあるわけでございます。ですので、これをお考えいただいて、声明文を出すことについて先生方の御意見を伺いたいということでございます。

以上です。

○議長 ありがとうございます。

大変分厚いものがございますけれども、要するにこれを声明として外部に公表することに関する御意見をちょうだいしたいわけであります。

少し時間がございますので、何か皆様方から御質問、御意見をちょうだいできたらと思っておりますが……。

採決は例によってあしたになるわけですが……。

どうぞ御意見をいただきたいと思いますが、どうでしょうか。

あるいはこの委員会の委員でいらっしゃった方、何か御追加でも、個人的意見でも、自分は反対だったのにと御意見でも結構ですが、どうぞいただけませんか。

どうぞ。

恐れ入りますが、お名前と御所属をおっしゃっていただきたいと思っております。

○笠木伸英会員（第3部） 行動規範の副委員長をさせていただきました。

若干補足させていただきますが、この春の総会で暫定版を御承認いただいたわけですが、先ほど浅島委員長から御説明があったように、多くの研究機関、教育機関に、あるいは学協会にアンケートをさせていただきました。それで、アンケート、大変たくさんあるのですが、取りまとめのグラフが17ページにございます。全般的にどういうふうにとらえられたかということをおっしゃったのですが、学術会議がこういった行動規範等を策定するということについて関係機関がどういうふうにとらえたかということですが、御回答いただいた数も大変多かったわけですが、その中の半数が、倫理意識も高め、あるいは適正な行動を促すということで、学術会議がこういうことを意思の表明といいますが、そういうことをすることに大変ポジティブにとらえていただいた。それから、どちらか、意識を高める、あるいは行動を促す、どちらかについては効果があるだろうとい

うところまで含めると、4分の3の御回答が大変ポジティブにとらえていただいたということですので、ざっくり言いますと、多くの方々から御支持はいただけたというふうに考えております。

ただし、細かい字句、あるいは内容についてはいろいろ御意見をいただいて、この中に含まれておりますように膨大な量にわたったわけではありますが、ただ、この中でも内容等について否定的な御意見をいただいたのは実はごく少数でございます。

御批判の中でもあえて多かったということで申し上げますと、行動規範そのものについてはやや具体性を欠く、抽象的であるという御批判がかなりございました。これについては委員会で議論いたしまして、行動規範というもの、その本体に加えて、先ほど浅島先生が言われました3番目の文章を準備をして、これを見ていただくことによって各機関での自主的な環境整備を進めていただくということで、セットで声明ということを出してはどうかというのが今回提案させていただいている趣旨でございます。

以上でございます。

○議長 どうもありがとうございました。

ほかに御意見ございますでしょうか。あるいは今の笠木先生のことに対してでもいいですが。

どうぞ、唐木先生。

○唐木英明委員（第2部） 内容は大変結構なのですが、この前幹事会でも一言申し上げましたが、もうちょっと詳しく追加をしていただきたいところがあります。

それは利益相反の問題ですね。これはアンケートの中にもたくさん御意見が出ていますが、例えば1つの例を申し上げますと、私の専門の薬理学とかトキシコロジーの研究者は企業の研究者が非常に多い。企業の研究者が企業のために研究することは既に利益相反の観点からどういうふうにとらえたらいいのかという問題。しかも、そこで出てくるデータというのは、例えば1つの薬をつくるのに10年とか20年、100億とか200億の金をかけた膨大なデータが特許の点から公開されないで、そして厚労省の薬物の審査委員会に出てくる。我々はその審査委員会限りということでその資料を判定するわけですね。それをもとにその薬を許可するかどうかを決めなくてはいけない。そうすると、論文に必要なピアレビューという過程を必ずしも通っていないものがたくさん出てくる。そういったものを我々委員がピアレビューのかわりをすると言いつつも、これは現実の問題としてはかなり難しい問題である。したがって、公開という原則も通っていない。

その辺のところを「公共性に配慮しつつ適切に対応する」という言葉で一言でまとめられている。一般的には大学の寄附講座であるとか、そういったものについてはそういった対応が可能かもしれませんが、必ずしもそれだけではない。もっと深い問題があるということで、もうちょっとこの続編としてぜひその辺も御検討いただきたいと思います。

○議長 どうぞ。

○浅島副会長 今、唐木先生がおっしゃられた事柄は我々のところでも非常に議論になったところでありまして、学術会議の今の会員の、あるいは科学者コミュニティーという全体を考えた場合に、単に大学とか研究機関、あるいは国の研究機関だけではなくて、企業、その他、一般の人たちもいるわけでございます。そういう中で科学者コミュニティーの中での利益相反というのは非常に難しい問題でありまして、今まさに唐木先生が御指摘いただいたとおりでございます。

企業の場合と大学等の科学研究費もあって、公益性のものとの間をどう区別するかということからいっても、一字一句、例えば4ページの一番最後の11のところの「利益相反」、これを一時外すということまでも我々は考えたぐらい、これは重要な問題であるけれども、なかなか書きにくい。それゆえ具体性を欠くとどこかが詰まってしまう。それはどういうことかという、科学者自身が本当に自由に発想しながら研究をするということと、会社の中での利益相反、特に最近では大学でも知的財産という問題が非常に大きくなってきて、この辺についての問題も非常に大きくなっていきますので、ここで言う「科学者は、自らの研究、審査、評価、判断などにおいて、個人と組織、あるいは異なる組織間の利益の衝突に十分注意を払い、公共性に配慮しつつ適切に対応する」という言葉ぐらいしか今のところは言えなくて、具体的に述べれば述べるほど必ず例外が出てくるんです。

この辺について、今の御指摘であれば、もう少し検討はしますけれども、我々としてはこれが精いっぱい書き方であって、これ以上突っ込むと、研究者は移れなくなってしまう。移動性、つまりそこでなされた研究はどこまでがもとの研究所であって、新規性はどこにあるかと。そうすると、この知的財産をAという会社が持っていたものを持っていったからできたのではないかという、あるいはテクニックを持っていたからできたのではないかというふうにしてもしも争われた場合には非常に難しいので、ケース・バイ・ケースでやってもらうしかないということと、それから科学者のここでの公共性というものを我々は考えていかなければ、この問題は新しく日本の科学者コミュニティーに起こってきた問題でありまして、今までの大学における、あるいは研究所における――企業は例えば

ブルーノートみたいなものをつくって、物すごくしっかり管理しているから、全部データは企業に所属するようになっております。ところが、大学は必ずしもそういうことにはなっていないわけです。その辺の歴史的な違いと習慣性の違い、その他いろいろなところがありましたので、今回はこれぐらいにとめさせていただいて、これの詳細については、もしも必要ならば改めて検討させていただくということにさせていただきませんか。

○唐木英明会員（第2部） 私もこれはこれで結構だと思います。しかし、今おっしゃったような問題、私が申し上げたような問題、いろんな問題があって、どこかでコンセンサスを得る必要があるということで、ぜひ次のチャンスに検討していただきたいということです。

○議長 ありがとうございます。

どうぞ、生駒先生。それからこちら。

○生駒俊明会員（第3部） 私、今の時点で学術会議がこの声明を出すことにはいささか問題があるのではないと。というのは、余りにも普通過ぎる文章であって、大変今問題になっていますような幾つかのミスコンダクトの問題ですね。研究者のミスコンダクトの原因がどこにあるかということをしちっと解明して、もう少し踏み込んだものを出さないと、今の特許の利益相反の問題もそうでございますね。今よく書き込めないからこれを出すというのでは多分一体何を考えているかというのが一般社会の反応だと思います。特に科学技術研究費の予算は非常にふえているとき、それからその配分が一部に集中している問題、それといろいろな不正、ミスコンダクトが起こっている問題とか、なぜこういうことが起こっているかということ进行分析した上で書かないと、この文章を見る限り、今浅島先生が説明された背景は見えないわけですから、いささか見識を疑われる問題。行動規範の時代ではなくて、倫理綱領だと思うんですね。倫理と倫理綱領を出さないと、世間の信頼が得られない。ですから、科学技術研究費の増大と不正というか、ミスコンダクトの増大といろんな問題をもう少し分析して、掘り下げた上で出さないと、かえってマイナスがあるのではないかという感じがしております。

○浅島副会長 ただいまの生駒先生の御指摘はまさにそのようなことだと一部思います。一部思いますというのは、我々はなぜそういうふうなことまで踏み込まなかったかということ、一部は大枠をつくりたいということがまず1つあったわけです。現実問題として、例えば文部科学省は科学研究費に対して非常に細則に決まっております。それから、JSPSもそうです。つまりファウンドエージェンシーというものがそこまで細かく決めている

のに、そしてそれはそれなりの理由でもって決めているのに、学術会議がそこまで踏み込んでいったときに、やはり学術会議は科学者コミュニティーが活性化していく仕組み、あるいは研究者が研究しやすい仕組みをつくることがむしろ重要であって、これだけは守ってくださいよということを今言っているんです。

です。余り踏み込むと、例えば資源の配分の問題を始めたらこれはもうとてつもなく、それは文科省やJSPSとか、あるいはJST、ここに会員の方もいらっしゃいますけれども、それから総務省もつけました。罰則、罰則です。そういうふうになると本当に科学者が夢を持って研究ができるかというようなことがありましたので、私たち委員会としては、これは守ってくださいということと、それからこういうふうな行動規範をそれぞれの人が自律的に実現してほしいというメッセージを出すことが我々が重要だろうというふうにして、今の言葉で言えば余り資源配分のところから根本問題については実はこれは私自身は次の問題だと思っております。そのようにお考えいただければありがたいと思っております。

○議長 今の点に関しまして1つだけ追加させていただきますが、この行動規範が出てくるまでの間に、この学術会議として最低2つメッセージを出しているわけでありまして、その中で原因はどこにあるかということを検討しております。ぜひそこも含めて御議論いただきたいと思います。

では、榊先生、どうぞ。

○榊裕之会員（第3部） 先ほどのコメントに少しかかわることで、私も一言コメントと提案をさせていただきたいのですけれども、一般に社会で科学者の行動規範ということを読んだときに、2通りのとり方がありまして、本当に純粋な科学者の場合と技術者も含めて科学者というふうにとらえる場合があると思います。技術者の場合には先ほどの薬学の例とか、環境の例も含めまして大変複雑な状況で、そう簡単に論じられないといいますが、ある面で継続して議論していく必要があるかと思っております。

ですから、今回はある面で大変錯綜した技術者の状況のことは継続的な案件として、まず学術的な機関において公開を原則とするような立場にある者にとって、1つのガイドラインを示したということで、学術会議としては第2弾を継続的に、これから何年かかけて考えていくというようなメッセージがどこかにあれば、それでよろしいのではないかと思います。

○議長 ありがとうございます。

時間が大分過ぎてしまいましたのですが、ただいまいただきました御議論などを含めまして、きょう午後あるでしょう、部会でどうぞ議論をしていただきたいと思います。煮詰めていただければ幸いです。まだまだ御議論があるかと思えますけれども、このぐらいにさせていただきます。あしたの午後この提案についての採決を予定しておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

それでは、浅島先生、どうもありがとうございました。

外部評価結果及び年次報告書についての報告

○議長 それでは、次の議題に移りまして、外部評価結果及び年次報告書につきまして、これは瀬戸委員長、どうぞお願いいたします。

ちなみに、年次報告等検討分科会の委員長でございます。

できれば少し短めをお願いできますでしょうか。よろしく。

○瀬戸皖一会員（第2部） 企画委員会の年次報告等検討分科会委員長の瀬戸でございます。

本日は、平成18年年次報告及び日本学術会議の活動に関する評価の説明をさせていただきます。お手元の資料6をごらんいただきたいと思います。

日本学術会議では、日本学術会議の新体制発足1年を節目として、平成17年10月から平成18年9月までの日本学術会議の活動状況等をまとめた年次報告書を作成し、年次報告書等をもとに有識者の方々に外部評価を実施していただくことになりました。

企画委員会のもとに年次報告書の執筆、編集及び外部評価に関する調査、審議する年次報告等検討分科会が設置され、この4月以降、審議をしてまいりました。

年次報告書は、日本学術会議の活動を概括的に記載した総論部分と各委員会等の活動を詳細に記載した活動報告等部分の2部構成になっております。

本日は、カラーのこの薄い資料6-1の総論部分の方をもとに簡単に御説明申し上げます。活動報告等の部分は大部となりますので、このCD-ROM化してございますので、これを御参照いただきたいと思います。

また、外部評価につきましては、活動報告等の部分として掲載されるものでございますが、本日は会員の皆様への御説明のために総論部分として資料6-2としてペーパーでお届けいたしました。

まず資料6-1、年次報告書の総論部分から簡単に御紹介いたします。

総論部分は本会議のこの1年の活動を概括的に記載したのですが、その構成としましては、資料をお開きいただきまして、2ページのところに黒川前会長の御挨拶が掲載されております。日本の科学者コミュニティーを国内外で社会的信頼ある存在にすることが我々の責任であると明言して結んでおられます。

3ページに、本会議の概要ということで、1番で、昭和24年に設置されてからの組織の沿革と昨年10月の改革の概要を、また2で、この1年の活動について総論的な記載がございます。

3ページに書かれております本会議の活動を、1、政府に対する政策提言の強化、2、国内外の科学者のネットワーク構築、3、科学の役割についての世論啓発、また4、国際的活動の強化ということに関しまして、4ページ以降に主要な柱ごとに説明がなされております。

14ページ、15ページは1年の活動記録として主要な活動をカレンダー形式にまとめております。

最後の裏表紙には本会議の組織、黒川前会長のもとでの組織がかかれてございます。

総論部分の中心となります3ページ以降につきましてタイトルだけ申し上げますと、まず3ページに日本学術会議の概要ということでございます。

また、4ページ以降は、日本学術会議は、先ほど申しました3つの柱で活動を行い、各委員会等で精力的な審議などが開始されているというようなこと、総合科学技術会議や各府省との連携に心がけた活動を行ったということ、国内外の科学者のネットワーク構築、また科学の役割についての世論啓発、国際的な活動等々が書かれてございます。

簡単でございますが、年次報告書について説明させていただきました。

次に、この年次報告書等をもとに実施した外部評価について説明申し上げます。これは資料6-2でございます。

さきに述べました年次報告書等をもとに、この6月に石井紫郎先生、井口洋夫先生、志村令郎先生、立花隆先生、辻篤子先生、中根千枝先生の6名の有識者の方々に日本学術会議の活動に関する外部評価をお願いし、御了承いただきました。

そして、事前に年次報告書案等をお届けし、ごらんいただいた上で、去る9月5日に企画委員会並びに年次報告等検討分科会を合同開催し、外部評価委員の先生方から本会議の活動状況に関する評価及び今後の課題等に関する御意見をちょうだいしました。ちょうだ

いした御意見をこの資料6-2にまとめてございます。

この1ページには、今申し上げましたような日本学術会議の活動に関する評価を行うに至った経緯が記されております。最後に2ページ以降に別紙としてこの1年の本会議の状況等に関する評価及び今後の課題等が取りまとめられておりまして、これらの意見を今後の活動に生かし、本会議が我が国の科学者コミュニティの代表機関としてますます活躍していくことを期待していることが書かれております。

1枚おめくりいただきまして2ページ目にはまず全般的評価とそれを踏まえた個別の今後の課題が書いてございます。さらに、3ページ以降に各先生方からいただいた補足意見が列記されております。

まず全般的評価につきましては、最初のパラグラフで、新体制発足から間もなく、審議のための体制整備にまず尽力が求められたという状況のもとで、全般的には本会議の活動が目覚しく、新しい日本学術会議として活性化の方向にあるとの先生方の考えが一様に書かれております。

具体的には年次報告書で紹介いたしましたG8サミットに向けた共同声明の発出や政府統計の改革に向けた提言等の発出、科学者の行動規範の策定等といった本会議の活動やマスコミにおける報道件数の増加など、本会議の努力に対し、一定の評価をちょうだいしております。

一方で、3つ目のパラグラフでは、他方、会員選考方法が変更になったことに伴い、本会議が科学者コミュニティを代表していることを外からわかりやすく認識できるよう努力することの大切さや、情報化社会の中で適切な情報発信機能をより一層高めることの必要性など新たな課題も生じていると指摘されております。

また、本会議の活動を支える体制が十分であるかどうかなど、検討する問題があるとされております。

今後の課題では、幹事を務めていただきました石井先生が外部評価委員の先生方全員の御意見を総括して6点にまとめてくださいました。

全般的評価で触れられている点もございますが、1として、本会議が科学者コミュニティの代表であることを会員の選考方法に関する情報を公開するなど引き続きより明確な形で示していく必要があること。

また、3ページ目でございますが、2として、本会議が科学者コミュニティの代表として我が国における大学や学術機関のあり方等について大局的な観点から議論し、提言等

を発出すべきであること。

3として、政策審議機関である総合科学技術会議と果たすべき役割が異なることを踏まえた上で、俯瞰的かつ中立的な立場で政策提言を行っていくべきことであること。

4として、審議テーマの設定や意思決定の過程などをより理解しやすい形で情報提供していく必要があること。

5として、国際活動については今後も国際学術団体による活動を支援し、国際協力のあり方に留意して、尽力すべきであること。

6として、日本学術会議の活動を支える財政面、スタッフ等の体制の充実がぜひとも必要であると述べられております。

補足意見につきましては、各先生からそれぞれ補足していただいた御発言を記しております。井口先生からは、国際活動と学会との連携のあり方について、また1枚めくっていただきまして、志村先生からは、学術のあり方に関する議論、提言等の重要性に関して、また立花先生からは、活動の目標、モデルに近づけるための戦略的な行動の重要性や世論啓発の重要性に関して、辻先生からは、国民にとって頼りになる機関だという期待感を持ってもらうことの大事さ、また政策提言の重要性に関して、中根先生からは、日本学術会議の費用面、人員面の補強の必要性に関してそれぞれ御意見をいただきました。

以上に報告いたしましたとおり、日本学術会議では今回初めてこの1年の活動状況等をまとめた年次報告書、新生日本学術会議1年目の活動を作成し、年次報告書等をもとに有識者の方々に外部評価を実施していただきました。外部評価委員の先生方には大変丁寧に見ていただき、学術会議に愛情を持って評価していただいたことに心から感謝している次第でございます。

本日、年次報告書の概要を御報告することにより、この1年の日本学術会議の活動実績に関して会員の皆様に共通認識を持っていただくとともに、外部評価で先生方からいただいた御意見等を皆様の今後の活動に生かしていただきますよう心からお願いする次第でございます。

最後になりましたが、年次報告書の執筆に御協力いただきました委員会、あるいは分科会の委員長の方々に対してこの場をかりまして厚く御礼申し上げます。特に活動報告部分におきましては新生学術会議の組織がまだ組織づくりに大変エネルギーを使っているさなか、1年で報告案を提出していただきまして、大変御協力をいただきましたことを厚く感謝申し上げます。

どうもありがとうございました。

以上でございます。(拍手)

○議長 どうもありがとうございました。

それでは、もしも御質問、御意見ございましたらお受けいたしますが、できれば……。

どうぞ。谷口先生。短くお願いします。

○谷口維紹会員(第2部) この資料6-2を拝見いたしまして大変重要な提言を評価の委員の先生方がしてくださっていると思いますが、特に3ページの第3番目に書かれております総合科学技術会議との関係が車の両輪であるということ、これは元会長が去年講演でおっしゃっていたことで、非常に重要なことでありますが、私の印象では車の両輪に近づくためにはかなりの努力といえますか、覚悟といえますか、そういうのが必要ではなからうかという非常に大きなクリティカルなポイントに今我々学術会議というのはあるのではないかというふうに私は認識しております。

そういう観点から、具体的なことは時間もありませんので、私、申しませんが、早急に何とか検討していただきたいのは、評価の6番目の提言といえますか、にあります財政面、それからスタッフの体制の充実ということは、これは焦眉の急と言ってもいいのではないかと思いますので、ぜひ総合会議に適切な対応をするということも含めまして、御検討いただきたいと思います。

○議長 どうぞ。

○瀬戸皖一会員(第2部) 御指摘いただきました点につきましては、9月5日の外部評価委員との会議のところで多くの部分を占めて御議論をいただきまして、この点、外部評価の委員の先生からも大変御理解をいただいておりますし、励ましのお言葉をちょうだいしております。また、企画委員会でもこの点につきまして積極的にずっと議論を続けているところでございますが、会長の方から御回答いただければと思います。

○議長 私、思いは谷口先生と全く同じでございますので、ぜひそういう方向で考えたいと思いますし、この場でおっしゃった石井先生は、車の両輪というけれども、実はギアが違うんだという表現をされて、非常に理解しやすかったと思っておりますし、また6の御提言につながる話だと実は思っておりますので、検討したいと思っております。ぜひ御協力をお願いいたします。

ほかにはいかがでしょうか。ぜひにという御意見がないようでしたら次に移らせていただいて——もう12時を過ぎておりますので、もしよろしかったら……。

どうもありがとうございました。

事務連絡

○議長 それでは、後は企画課長からどうぞ。

○會田企画課長 午前中の最後に私の方から事務連絡をさせていただきます。

これから1時半まで昼食の時間帯になりますが、お弁当を事前に注文されている方は5階と6階の各部会の会議室の前で販売しておりますので、現金と引きかえになりますので、お忘れのないようお願いいたします。

それから、本日の昼休みの時間帯にいろいろな委員会が開催されるかと思いますが、お配りしております資料の参考3をごらんになりまして、会議室を御確認いただければと思います。

それから、午後は1時半から部会が、そして3時半から再び総会が予定されております。明日は10時から総会がございます。

明日は、夕方5時半から新会長・副会長の就任祝賀懇親会が講堂前のホワイエで開催されます。恐縮でございますが、会費制となっておりますので、御参加いただける方でまだ会費を支払われていない方はお配りしました封筒にお入れになり、1階クローク前の事務方にお渡しくださるようお願いいたします。

なお、夕方のその祝賀会では高市大臣、それから日本学術会議に関する国会議員懇話会の先生方もお見えになって御祝辞をいただくことになっておりますので、あらかじめ御案内申し上げます。

以上でございます。

○議長 どうもありがとうございました。

それでは、午前中の総会を終わらせていただきます。ありがとうございました。

午後0時03分休憩

午後3時40分再開

自由討議

○議長 時間が過ぎておりますので、そろそろ始めたいと思いますが、お席にお着きいただけますでしょうか。

ただいま106名だそうございまして、105名が定足数なのでぎりぎり成立しております。午後の会議を開催いたします。

本日は自由討論ということになっておりますけれども、午前中お知らせもございましたように、恐らく17時15分ごろに高市早苗内閣府特命担当大臣がお見えになることになっておりますので、そのときに討議を終えないといけませんので、そこだけ御了解いただきたいと思っております。

自由討議ということほど難しいものはないのでありまして、全く自由にするととんでもない方向にいつてしまいますので、こういうふうにしたいと思っております。

日本学術会議が新体制になりましてからちょうど1年が経過いたしました。しかもこの8月にはトータル2200名の会員及び連携会員全員がそろいました。今後この学術会議がどうあるべきだろうかということに関しては、先ほども申しましたように、皆さん方からの御意見をいただきながらこれから進めていくこととなりますけれども、その前哨戦のような形で御自由に今後のあるべき姿といいたいでしょうか、重要な問題点として挙げるべきことは何かというようなことに焦点を絞ってお話をいただければいかかと思っております。

幸い1時間半ほどございまして、その前半に各部長からお話をいただくことを手始めにしたいと思っておりますけれども、私が何を考えているかというのは、むしろ途中で言わせていただいた方がよろしいかと思っておりますので、先ほど精神的な話はいたしましたので、具体的な話は先生方の御意見を伺った上でと思っております。

それでは、第1部長、広渡先生から、恐縮ですが、ここにおいでいただいて御発言いただきたいと思っております。

○広渡清吾会員（第1部） それでは、第1部から簡単な報告をさせていただくことにい

たします。

連携会員 1990 名、会員 210 名で 2200 名の新しい体制が確立したわけですが、その全体をどのようにこれから動かしていくかということについては、分野別委員会のもとに設けられました分科会が一番重要な役割を果たすということになります。それを中心に現在の状況をお話しして、今後の問題点のようなことについて少し触れることができればと思います。

第 1 部関係の連携会員は全数で 603 名になりました。第 2 部が 698、第 3 部が 689 で、会員に対応して連携会員も大体 1・1・1 でいこうではないかという、そういう了解のもとで第 1 部についても 600 名台の連携会員が誕生したということでもあります。

第 1 部関係の分科会の設置状況ですが、少しずつ進んでおりますけれども、現在設置済みの分科会は 48 でございます。うち、国際対応のいわゆる国際委員会との関連での分科会が 6 ございます。もう 1 つは、第 1 部関係の 10 の分野別委員会の合同で立ち上げた合同の分科会が 1 つございまして、きょう第 1 回を始めたところですが、人文社会科学の学術全体における役割について総合的に検討しようという分科会を立ち上げております。そのほか、設置検討中のものが 12 ございますので、もう少しふえるかもしれません。完成した段階で 60 台の分科会が設置される見通しであります。

連携会員の参加をいただいて、分野別委員会と分科会の関係、分野別委員会にどのような形で連携会員にお入りいただくかということも 1 つの重要なポイントになっております。第 2 部、第 3 部でも同じような議論が行われていると思いますけれども、分野別委員会の構成を余りに大きくしますと、定足数の問題があつて、マネジメントをすることに障害が生ずるかもしれない等々の問題があり、第 1 部関係でも 3 つぐらいのパターンで分野別委員会の構成のパターンがあるように思われます。

調べてみましたが、1 つは会員だけで分野別委員会を構成するという型。それから、第 1 次連携会員を既に分野別委員会に吸収をして、それで全体の運営を図るという型。3 つ目は、分科会の役員、これは委員長だけにするか、あるいはその他の役員も含めるかというふうにバリエーションがありますけれども、分科会の責任者に分野別委員会に入っただいて、分野別委員会を分野の全体のマネジメントをする役割を担う。この 3 つぐらいの型が現在の第 1 部の状況ではないかと思えます。それぞれ分野の状況がありますし、分野別委員会の会員の数との関係もありますので、そういうこととの関連でそれぞれのパターンが決まっているように思われます。第 2 次連携会員まで含めて全部分野別委員会に

入っていただいて、その中に運営委員会を設置して、運営委員会がマネージをする。ですから、定足数は運営委員会の会員の数を定足数の基礎にしながら、必要なときには拡大運営委員会という形で運営する。こういう形もあるかと思えますけれども、今のところはまだ第1部ではその型はございません。

学協会との連携については、これも分野ごとにさまざまな形で進められているというふうにしかな一般的には申し上げられませんけれども、きょうの部会でも——第3部の小林俊雄先生が第3部関係の学協会について非常に詳しい調査をされて、ヒアリングをされました。7月の連合部会で発表になりましたけれども、その資料をいただきまして、もう少し学協会の具体的な状況についても把握しながら、これはやはりそれぞれの分野の実情に応じることが一番でしょうから、その状況に応じたパートナーシップの追求をする必要があるのではないだろうか。

それと関連して先ほどの部会ではかなり時間を使いましたけれども、協力学術研究団体を認定する認定の仕方の1つに連合体の認定というのがあるわけでありまして、科学者委員会からの提案では連合体を認定する場合には、その連合体を構成する個々の学協会が既に指定された、つまり協力学術研究団体であるということを前提に、その3つ以上のコンビネーションを連合体として認めるといふ、そういう提案になっておりまして、これをめぐって議論がありました。つまり大きなもの、個別に認められるときには、100人以上の会員、学協会のメンバーが必要だという要件になっていますけれども、指定された大きな学協会の横に100人未満の小さな学協会をくっつけて1つの連合体として学術会議と対応する。学術会議がそれを認めて、対応する。この形が科学者委員会の提案では認められないということになっておりますので、このあたりをどう考えるのかということもきょうは部会でかなり議論になりました。提案の趣旨はよくわかりますので、それでいこうということには一応なりましたが、今後の検討課題ではないかというようなことであります。

それから、連携会員の数が非常に多くなってまいりましたので、会員と連携会員との間の交流、コミュニケーションを確保することをいろいろと考えていかなくてはならないだろうということがございます。ホームページの活用はもちろんですけれども、部としてはニューズレターを発行しておりますが、これをもう少し連携会員の声も吸い上げた形で編集をするとか、それから連携会員にメールで一斉に案内できるような体制、今事務局で考えていただいています。第1次の連携会員については既にメーリングリストが作成されているのですけれども、第2次まで含めてそれができ上がれば機動的に連携会員に対する連

絡も可能になるだろうと。

分科会が自律的に動き始めましたら学術会議の活用力はうんとアップすると思いますけれども、それまでにいろんな手だて、工夫をしながら分科会が立ち上がって独自に活動できるような体制を早くつくる必要があるだろうと。この関連では部としては分野別委員長の集まりを重視して、それを通じて分科会の活動が進展するように図っていくことが必要ではないかというようなことを考えております。

以上、この1年間の状況を見て、連携会員の就任とあわせて分科会の設置も大体めどがつきそうだというのが現状ではないかと思っております。

以上でございます。

○議長 どうもありがとうございました。

スペシフィックな御質問をととは思いますが、後でまとめて御意見をいただくことにいたしますしょう。

次は、第2部長代行ということで、唐木先生、お願いいたします。

○唐木英明会員（第2部） 唐木でございます。第2部長が急に会長になってしまって、2日間の部長代理ということで、2部の状況をお話しさせていただきたいと思っております。

と申しましても、きょうの午後、先ほどまでの2部会で、これから2部の活動をどうしようかという自由討論を行いました。時間が短かったので十分な議論はできませんでしたが、そんな討論の内容、それから私自身の個人的な感想も含めて少しお話しさせていただきたいと思っております。

19期までおられた先生はよく御存じだと思いますが、19期までの学術会議の活動というのは研連が中心でした。多くの研連が独自に活動して、それがボトムアップの形になって学術会議全体の活動を形づくっていたというのが1つの大きな特徴だったと思っております。

20期になって研連が廃止されて、研連の委員がなくなって、連携会員を選ぶというのがこの1年間の仕事になってしまった。ですから、この1年間は19期までに比べると学術会議の活動としては非常に低下せざるを得ない状況にあった。それを救ったのが黒川会長の非常に個人的な努力と言ってもいいのではないかと思うほどの大変な努力をされて、対外活動というところで学術会議の名前を非常に上げたという、そういう大きな功績があったと思っております。

幸いにして連携会員がすべて決まりまして、やっとこれから分科会活動が始まるという、そういうことになった。そうすると、今まで黒川会長がやっておられたような対外活動、

これは続けていかななくてはいけないけれども、これは先ほども御紹介があったように黒川会長の非常に個人的な魅力、能力、あるいは熱意というものに負うところが非常に大きかった。ですから、これは今後組織としてどうやってこれを継続していくのかという、その組織づくりというのが1つの大きな課題だろうと思っております。

それから、もう1つは、連携会員を中心にして分科会を構成して、その分科会の活動をいかに活性化していくのかということが1つ問題になりますが、これは私は余り心配していないのは、分科会ができて、それが動き出せば、自然に活性が出てくるだろうと思えます。

ただ、1つ問題なのは、学協会と公式に学術会議の関係が切れているということです。しかし、分科会活動を始めればすぐわかるだろうと思えますが、やはり学協会と何らかの連携、あるいは援助がないと分科会活動というのは決してうまくいかないだろうと思えます。そここのところを昔のようにべったりにならないということを守りながらも、両者がどうやってうまく協力をして、両方にメリットがあるような形で活動を続けていくのかという、その辺の模索というのがこれからの分科会の1つの大きな課題になるのではないかと、そんなことも考えております。

それから、きょうの午後の2部会で1つ大きな話題になったのは「学術の動向」ですね。先生方お忙しい中で非常にいい原稿を書いていただいて、大変内容のある雑誌ができ上がっているにもかかわらず、発行部数が3000部ちょっとしかない。ほとんど世の中の人には読んでいない。こんなもったいないことはないということで、これをせめて連携会員全員に読んでいただき、あるいは全大学、あるいは公立の図書館、いろんなところに、できれば本屋さんで買ってもらえるような形にするにはどうしたらいいのかということも我々真剣に考えなくてはいけないだろうと。そんなことも学術会議の存在を世に知らせるという1つの大きな事業だろうというふうに思います。そんなことも話がございました。

そのほか、細かいこともいろいろありますが、その程度にしておきます。

○議長 ありがとうございます。

それでは、次に第3部の海部先生、お願いいたします。

○海部宣男会員（第3部） 第3部につきましても連携会員がそろいました。いよいよ分科会等の立ち上げが急ピッチで進んでいますし、それをどう運営するかにつきましても先ほど広渡先生からありましたが、同様にいろいろ工夫しながらやっているということで、恐らく分野の運営についてはまだこれから1年ぐらいは試行錯誤が続く可能性があると

っております。できるだけ早くいいスタイルをそれぞれで確定していくということになると思います。

さて、この1年間の活動ということですが、もちろん1年間を振り返るというよりは、今既にお話がありましたように、この1年間は組織づくりの1年間、これからどうするかということでもあります。

先ほどの第3部の部会でいろいろな議論をいたしました。その中からたくさん有益な議論があったわけですが、4点ほど御紹介したいと思います。

まず最初は、これは総合科学技術会議の議員である柘植先生から積極的な御発言があって、大変活発な議論が展開されましたが、総合科学技術会議との関係を具体的なものとしてどう構築していくのか、そのことについてさまざま議論がありました。車の両輪とっていろいろありまして、どっちがペダルだとか、ハンドルだとか、ギアが違うとか、いろいろ表現はありますが、正直言ってまだ両輪になっていないというのが私たちの持っている印象なわけですね。これはやむを得ない面がある一方、日本の科学、学術というものの将来を考えると、本当に両輪がちゃんとかみ合って走らないと大変なことになるということも私たち重々感じているところであります。

そのためにも1つの提言——これは今までは実際のボトムアップの活動がこの1年間十分起きませんでしたので、やむを得なかったわけですが、これからはそうではないわけでありまして、特にそこで強調されたことは、やはり学術会議として総合科学技術会議とタイアップしながら何をやるのかという、この役割の違いということがあるというのは午前中の総会でも議論されたとおり、それを認識しながら具体的な役割、任務、それから総合科学技術会議に対する注文、あるいは総合科学技術会議から学術会議への注文、こういうものを明確にしながら組織的にやっていくことが必要だろう。これまで多分2カ月に1回でしょうか、総合科学技術会議との定期協議というのでありまして、会長、副会長がお出になっていらっしゃるんですが、こういう場をもっと活用して、そういうところに具体的な提案が出ていく。あるいは具体的な提案が総合科学技術会議からもあるといったような、本当にギアのかみ合った両輪として機能するためのとにかく一步一步進まないといけませんので、そういう活動をこれから非常に意識的に進めるべきではないかという議論があったことを御紹介しておきます。

それから、もう1つ、これは科学者の行動規範でもちょっと出た話ですが、技術者と書かれるこの問題をどうするのかというのはやはり大きな問題ではないかと。とりあえず科

学者の行動規範ではああいう形でいわばオリジナルな論文を公開性を重んじて成果を出していくような方々がこれは中心なんだということで、とりあえずはもちろんそれでも大変重要なことだと思いますが、あそこでは6分の5という数字が出ておりましたけれど、いわゆる技術者という方々については学術会議としてどういうふうを考えていくのかということをややはりこれは避けなくて考えていかなければいけないのではないかとということです。それで特に科学者の行動規範につきましてはそういう面もこれから考えていくということをごどこかでメンションしてほしいという強い意見があり、それは賛同も多かったと思います。

3番目に、これは前から言われていることですが、いろいろな活動のフォローアップのシステムをもっとしっかりつくっていかないと、これからどんどんふえるわけですね。連携会員もふえましたし。ですから、そういう非常に活発な活動が期待されると同時に、その活動の結果、勧告が出たり、要望が出たりしますが、そういうのをフォローしていくシステムがやはりもう少し明確なものとして、特にそこで、これは大垣副会長からも言われましたが、出した当人たち、私たちもそのフォローアップをしっかりやるようなシステムを意識的につくっていく。こういうことをしていくことがどうしても重要だろうということでもあります。

4番目は、こういう話はお好きでない方もいらっしゃるかもしれませんが、しかしながらやはり学術会議の体制と申しますか、財政の問題、サポートのシステムの弱さというのは正直言って、私、去年初めて学術会議の会員という立場になりましたけれど、一番ショックを受けたのはそれですね。学術会議に、事務方は別として専任の方はいらっしゃらないというのは大変なショックです。例えばフォローの問題1つだって専任の方がおられれば、そういうフォローの体制を常時考えながらやっていくことができるわけです。それから、強く指摘されるのは例えばホームページ。ホームページは私は大変よくなったと思うんですね。この辺も黒川会長が非常に努力されて、事務方も頑張られて、しかしながらあれで十分かというところはまだ大変使いにくい。よく知らない方があそこを見てどれだけの情報を引っ張っていけるかということ、大変だと思います。私はようやく最近なれてきましたけれど、例えばああいうものにしてどこかに投げているものができるはずは決してないわけで、日夜そういうものを改善しようとする専任のスタッフの方がいて初めてそういうものはうまくいく。ですから、そういう面も考えますと、今の学術会議が60人の事務の方々が物すごく大変だというのは我々はよくわかっているわけで、余りにも全体が弱

体過ぎる。

それから、もう1つ、旅費の件とかいろいろあって、そういうことをあんまり議論するのはもちろん気持ちのいいものではありませんけれど、そういう話が出ますと、私の印象は今の学会はまないたの上ののっているのだから、予算の増額要求なんかとんでもないというのが事務方の一般的な感覚であって、そのためにはいい活動をしなさい。いい活動をしようと思ったらサポートがないと。こういう悪循環に我々はいると思うんですよ。これをどこで断ち切るか。どこかで断ち切らないといけませんですね。それをどちらもお互い待っていては話にならん。どうすればいいか。これはやはり私たちの工夫ではないかと思えます。

そういう面で、先ほどもその話が出て、金澤会長、やりますと、おっしゃっていただいたので、私はこのことは本当に本気になって取り組まないと、頑張っればやるほど自分で自分の首を絞めるという状況に陥っていくおそれがあります。今のところはまだまだやろうという気持ちで皆さんいらっしゃると思えますけれど、何とかその辺の打開策も考えていく必要があるだろうと思えます。

というような議論をいたしました。第3部としましては、あしたの部会でこれからの第3部としての活動を議論するつもりであります。基本的には各分科会ができますと、分野分科会がその分野のことについては中心的にどんどんいろんな議論をしたり、シンポジウムを開いたり、アピールを出したりしますが、今回の特徴はそれが全体30の分野委員会にまとめられて、その分野委員会は何をするかというのがやはり1つの大事なポイントだと思うんですね。分科会だけの活動だったら、それは旧来の研連にどうしても近いものになります。それはそれで大事ですからやるとしまして、30の分野、それから3つの部というものがもっと包括的な立場でどういう活動をするのかというのは、これは正直言って私はまだ見えているとは決して言えないのでありますが、それぞれの分野ではもう既にいろいろな議論をしていただいているわけでありまして、そういう活動もあわせてこの1年間、先ほどもお話のように、いわばトップレベルの活動が目立った1年ですけれど、学会はボトムアップの活動もあって初めて学会になるわけでありまして、そういう面です。これからからが正念場かなという気がしているわけでございます。

○議長 どうもありがとうございました。

非常に適切なサゼスチョンをいろいろいただいたと思えます。

それでは、御自由な御発言をいただく前に、それぞれ各部からお話をちょうだいしたわ

けですけれども、御質問ございますでしょうか。お話しいただいた内容に対して……。

特にございませんようでしたら、それでは、今いろいろ御議論いただいたといいましょ
うか、御提案、提示をいただいた中で、少し御議論をいただきたいところがあります。ま
だ議論が始まったばかりですから、こういう少し時間がある間にお伺いしておきたいな
うことがありまして、恐縮ですが、私から1つ皆さん方にこの問題に対して少し御意見
をいただきたいということを申し上げたいと思います。

それは、えげつない話になるかもしれませんが、しかし非常に大事な問題として、
最後に言われた財政の問題であります。これは前々から実は問題になりながら、いいアイ
デアが十分出ないままきておりまして、もちろん残念ながら立場上、難しい問題、という
よりも、むしろ今のままでは不可能な問題が幾つか横たわっていることは御承知のとおり
なんですが、それでもなおこういうことが大事だと思うと、こういうふうにやればいいの
ではないかと思うというような御意見、御提案がありましたらぜひお聞かせ願いたいと思
います。こういうチャンスはめったにないのでありまして、初めてなものですから、勝手
なことを言えるのでお許し願いたいと思うんですが、どうでしょうか。

どうぞ、北澤先生。

○北澤宏一会員（第3部） 先ほどの河野先生からの第3部の議論の御紹介があったので
すが、今学術会議の年間予算というのは13億円ぐらいで、これも年々場合によっては減
っていくタイプの、そういうお金として位置づけられていると思うんですが、このままで
いくとなかなか望みがないということで、アメリカのナショナル・アカデミー・オブ・サ
イエンスは50億円の寄附金でやっている。まずこれが基本的な部分で、寄附金で一応の
運営をして、そこに190億円の国からの委託金がかかるということで、240億円。大体日本
の学術会議の20倍近くの予算でやっているわけですけれども、そういうことから考えま
すと、同じようなことをやっていたのでは20分の1ぐらいのことをやりなさいと。早く
言えばそのくらいで我々は満足するというのがまず1つの手ではあるのですけれども、そ
のときに最近国のやり方も大分変わってきましたので、ある部分は国の機関としてやって、
ある部分に寄附金を受け入れられるような、そういう機関をつくるということを真剣に考
えていただいて、それで経団連、その他にも働きかけて、日本の学術会議はこれでいいの
かという感じで、私たち自身も反省しながら、財界、その他にも働きかけていく。特にキ
ャッチアップ時代は政府のお金100%でやって、効率高くキャッチアップしていけるか
と思うんですが、多様性を重んじるようなそういう時代になると、政府のお金100%でやっ

ていたのではどうしても多様な社会のニーズにこたえられなくなるのではないかというふうに思いますので、このあたりでそういう可能性をどこか真剣に考えるような、そういう委員会など発足させていただけたらいいのではないかなという感じがするのですが。

○議長 ありがとうございます。

うなずいていらっしゃるんですけど、海部先生、何か……。

○海部宣男会員（第3部） まさに思っていることを言っていて、私としては、正直言って内閣府直属の機関でありますね、学術会議は。そのことが寄附を集めるということがかなり難しいのではないかというのを実は私はちょっとおそれる。ただ、学術会議同友会でしたか、ある種の仕組みをつくれればそういうことは恐らく不可能ではないはずで、そういうことをしっかりやるということとあわせて、やはり私たち会員なり、連携会員なりもそれを支えるために少しは出すのだというぐらいの気構えで、私はそういうところからスタートしないと、今のネガティブループから抜け出せないのではないかと、今の御発言に賛成でございます。

○議長 ありがとうございます。

第2部でも類似の議論があったかと思えますけれども、どなたか御発言ございませんか。ありませんか。

アイデアが余りないという意味ですか。

どうぞ。

○土井美和子会員（第3部） 私、企業、東芝から来ているので、確かに御寄附という話も解決策としてはいいと思うんですけども、ただ、寄附を集めるというのはそれなりのどういうミッションを負っているかということを確認していくことがないと、今の企業の状況からするとなかなかお金を出しにくいという状況にあるのも事実かと思えます。

そういう意味では1つ、柘植議員がいらっしゃいますけれども、先般第3期の基本計画が決まったわけですけども、今動き始めているわけですが、では、次の第4期に向けて学術会議が一体何を発信するのかというような、そういう明確なミッションを持って、そこに例えば経団連とか、経済界の人間も入ってきて、私、ダボス会議というのはどういうあれなのかよくわからないのですけれど、そういうような感じで、毎年学術会議と経済界、経団連とか経済同友会とか、そういうところがテーマを決めて議論をして、それが最終的にはこの次の第4次の基本計画に提案するというような、何らかのミッションを設けて、そこに賛同する企業は参加するための費用を出すというような形でやるようなのであれば、

寄附にはならないわけですし、それをやることで、先ほど第3部のときに大垣副会長から御指摘のあったどうしても学術会議で総合科学技術会議に出ていったときに、出てきた提案に対してコメントするという立場になるというのは、やはりどこかで先手を打たなければいけないので、何に関して先手を打つかというのを決めてやる。基本計画がいいかどうかというのは、皆様いろいろ議論していただければいいと思うんですけども、この学術会議のメリットはやはりこれだけ第1部、第2部、第3部ということで、全部の分野をカバーしているということと、学会とかに比べると、学会理事とか皆さん任期2年に対して、ここは短い方も3年だし、長い方は6年なので、そういう意味では長期に日本の国がどうあるべきかというのを議論することができる体制にあると思うんですね。ですから、そういう体制を生かして、なおかつ、経済界からも賛同を得られるようなミッションをつかっていけば、寄附というよりは、もうちょっと前向きな形でお金を出してもらえるような枠組みはできるのではないかと思います。

どういう枠組みが可能なのかというのは、国の体制とか、よく私は存じ上げないのですが、何かそういう工夫が1つあるのかなと、すごい個人的な意見ですが、思いました。

○議長 ありがとうございます。

大変貴重な御意見だと思います。

ほかにどうでしょう。

どうぞ、石倉先生。

○石倉副会長 今回の御意見にちょっと刺激されたという感じなんですけど、多分第3期基本計画に全く余り接点がなかったというような印象を皆さん持たれているかもしれないのですが、一応「日本の科学技術政策の要諦」というのを出しているんですね、その前に。私は昨年初めて会員になったので、そのときから割と一生懸命読んだのですが、かなりよくできていて、そのアイデアがいろいろな形で第3期基本計画に一応入れ込まれた部分があるんだと思うんですね。ですから、そういういろんなことをやっているのだけれども、それがもう1つうまく伝わっていない。あるいは会員にも伝わっていないというのが事実だと思うんですね。そこはかなりいろいろなことをやる必要があるだろうと。

それから、もう1つ、ダボス会議とか、1部、2部、3部全体がいるので、それと産業界と連携したような会議のようなものというのはアイデアとして非常にいいと思います。今の問題は、私も産学連携とかいろんな国際会議とかいろんなところに断片的に参加した

ので、なかなか全体像が見えなかったのですが、今、いろんなことをやっているんですね。ですから、これだという1つのことがなくて、産学連携にも出てくれば、STSフォーラムの東京版、オープン版にも出てくれば、この間の持続可能なものにも出てくればと、いろんなところに、資源自体が余りないのに、それが物すごく分散されている。今回の持続可能な会議などは4つの団体が共同して1つやりましょうというやり方でかなりいい人を呼んだり、お金も少し使えたりという形でやったのですが、資源がない、プラス、分散してしまっている。だから存在感がまるで外の人にも見えない、中の人にも見えないという状況だと思うんですね。

では、どうしたらいいか。リソースを集めるところは集めるというので1つあるのですが、学会全体としてこれは我々がやっている会議ですと。非常にユニークで、ほかのだれがやっているのとも違いますという、何かそういう会議でも、イベントでも、できればそれが1つのシンボルになって、私はマーケティングとかもやっていますから、外へ売りにいくのにも売りやすい。みんながメッセージがはっきりすれば、ある程度のインパクトができるんですね。

そこでちょっと心配なのは、いろんな会議の中を見ていると、1部、2部、3部、あるいは分野によって皆さんの御経験と御意見が違う。それがいいところでもあるのですが、それで議論していると限りなく議論が続いてしまって、なかなかまとまらないというのが現状のような気がするんですね。そこをどこかクリアしないとちょっと難しいと思います。

ただ、何か学会会議ってこういうことをやっているのですと、一言で言えばこういう人たちがいて、こういうことなんですというのが言えないと非常に難しいと思います。

○議長 ありがとうございます。

今の点についてですが、大変大事な御指摘をいただいたとは思いますが、資源が少ないところに分散しているということで、一見すると確かにそのとおりですね。では、それを絞ればいいのかというと、そうでもないのではないのでしょうか。

それについて、両副会長、どうですか。

○浅島副会長 日本学会は、例えば49……、48でしたかね、の国際対応をしまして、各連携会員及びそういうものの派遣ということもやっておりますし、ICSUも含めて、IAAも含めて、いろんな会議で国際対応、それからG8サミット、アジア学会、そういうものも日本学会だからやっているというものがたくさんあるわけです。

ほかの外国とのアカデミックな対応はかなり日本学術会議が引き受けている。ですから、それを絞った場合には本来の学術会議の役割はなくなってしまうので、その辺は非常に慎重にやらないと、せっかく今まで積み上げたものがなくなるということもありますので、今後もしも今石倉副会長が言われたようなことであれば、G8サミットのときの出し方とか、アジア学術会議の出し方とか、そういうものでの出し方をうまく出していくことが重要だろうと思っています。

○議長 どうぞ。

○大垣副会長 今回の石倉さんの御指摘はさまざまな持続可能とかイノベーションとか現在の社会の中でのイベント的にある種の社会的な運動体をつくろうとする動きがやや分散しているので、同じ方向のものは一緒にすれば効率というか、資源の分散にならないのではないかという意味合いの範囲内のことであって、一般的な資源の分散の話ではないのではないかと私は思っています。

ついでで恐縮なんですけど、ただ財政の問題を議論するときに、1つ定量的な議論をきちんとしておかないと、100億の話をするのか、ウェブを直すのに1000万あればいいという世界ときちんとしないといけない。例えば今「学術の動向」を出している財団がありますが、もしもあそこが寄附が募れるなら財団に、これは仮の話ですが、定量的に、例えば2200人が1人5万円出せば1億円になるという世界の議論なのか、もう少し大きな議論なのか、残念ながらこの1年間話題は出ながら詳細な議論はできませんでしたが、これからしないといけないのではないかという気がいたします。

○議長 かなり具体的なお話をいただきましたので、イメージがわいたのではないかと思います……。

先ほど——ここではなかったか、振興調整費で学術会議が請け負って学協会との関係をいろいろ調査したり、今後のあり方を考えるということが多分実現するだろうと思いますが、その受け皿が財団になっているかと思います。そういうものが今後どういう形でいい結果を生んで拡大再生産ができるかというのは非常に大きな問題だろうと私は思います。また、振興調整費の上の方で統括されているのは総合科学技術会議でありますので、総合科学技術会議との関係ということもまたそういう意味でも非常に重要な問題だろうと思うんですね。そろそろ問題をそちらの方に移して御意見を伺えればなと思いますけれども、いかがでしょうか。

柘植先生、口火を切っていただければと思いますが。

○柘植綾夫会員（第3部） 石井紫郎先生初めの評価の中で総合科学技術会議の両輪という話の改善という指摘があったと思います。あれをこれからどういうふうに具体化していくか、分担していくか、こういう話からもぜひ今度新執行部がとらえていただいて、その中で、私、第3部の中でちょっと御披露したのですけれども、既に必要だと思われるボトムアップ型の、かつ、しかしそれはトップとして、学術会議として、組織としてオーソライズというか、方針の中に組み入れるものが幾つか出始めている。例えば馬越先生が始められていますいわゆる研究の評価というスキームですね。これはやはり学術会議が担う部分が相当あるなど、私自身も同意しています。こういうことができますと、これは内閣府の中での1つの分担として、学術の場で分担して、その中に当然人も要りますし、金も必要になってくるし、別な言い方をすると1つの事業として、学術会議の事業として回り始めるかもしれない。あるいは科学技術のイノベーション分科会というのを始めていますが、あれは総合科学技術会議の方が6月につくった戦略があるわけですけれども、あの戦略でいいものはどういうふうに具体化していくのか。この戦略ではだめだというものの観点がある。そこではかみ合うと思うんですね。そういう幾つかのものが出始めている。

問題は、私はそれを新執行部の大きな施策の中に入れること、そういうたぐいのもので具体的に、先ほど土井さんの御発言があったような形も含めて、似たようなものがあるのではないかと、各論としてですね。それをまずプライオリティーをつけてリストアップしてみて、それをどういうふうに、どの部会が責任を持ってそれを具体化していくか。こういう作業をしていくことが必要だと思います。

その結果、もう1つ大事な話は、今までの提言、先ほどの第3期に向けた要諦というのが出ましたけれども、あれはこちらからの一方通行だったと思うんですね。ですから、そうじゃなくて、やはり日常の日本学術会議と総合科学技術会議の会話の中で、これは学術会議側としてはやるべきだと思うと。総合科学技術会議からぜひこれは頼むと。こういうインターラクティブな合意の上で、先ほどプライオリタイズしたものをきちっとやっていく。こういう形を私は進めるべきだと思います。今まで余りにもトップ、一方向過ぎていく。あるいは余りにも下のボトムアップ型の活動が上に伝わっていないという構造をいかに直していくか。執行部だけではなくて、やはり各部がきちっとサポートせないかんと思っています。

そういう形で、そうすると、最後の資金の問題というのは、多分おのずとそこは解決できる道ができると思うので、いきなり金の話という話ではなくて、ぜひ海部3部会長が言

われたような1番目の話から始まって金の話になるべきではないかと思うんです。

○議長 ありがとうございます。

大変道筋のあるお話をいただきました。

ほかにいかがでしょうか。

どうぞ。

○井上達夫会員（第1部） ちょっとうたた寝をしていましたので、議論を外れているかもしれませんが……。

実は科学者行動規範委員会の委員でもあったので、そのとき幾つか御批判をいただいた点もあって、それに対する応答と今の問題とが実は少しかかわってくると思いますので、少し発言させていただきたいのですが、先ほど石倉さんがおっしゃったリソースという問題ともかかわってきますが、リソースとは何かと。お金というのはすぐ浮かびますけれども、お金はないでしょうね。でも、リソースというのはもう1つ我々にとって重要な知恵であります。知恵は、これでないと言ったら我々の組織の存在理由はないですね。もう1つ、時間ですね。時間は皆さん忙しい。金と時間はないけれど、知恵は結構ある。問題は、ですから、かなり知恵はあるので、この知恵をいかに効率的に使うか。そのプロジェクトを組んでいただくことだろうと。そのためのフィロソフィーが必要だと思います。

そのとき、大切なのは、先ほど私は非常に頭にきているのですが、外部評価云々ということで、それに対して受動的にどう対応するか。今、実はこれは学術会議だけではないですね。いろいろな大学、さまざまそうです。今、アカウンタビリティという言葉が時代のキーワードとして流通しておりますが、私から見ると、これは全く逆の意味に使われている。本来アカウンタビリティというのは、政府諸機関、あるいは企業について言えば株主総会で各株主が経営陣のアカウンタビリティを問う。国政全般について言えば、官僚諸機構、政治家、その人たちについてのアカウンタビリティを市民及び我々科学者コミュニティーの一員が問うというのが本来のアカウンタビリティであります。

ところが、逆でありまして、学術会議は存亡の危機を切り抜けたということでもありますけれど、我々が実は官僚主導の外部評価のシステムの中で評価されている。もちろん必要ですよ、それは。惰眠をむさぼる組織はどれも腐りますから。しかし、一番腐ってはいけない組織が今惰眠をむさぼっていないでしょうかね。

これを前置きにした上で言いたいのは、先ほど科学者行動規範委員会についていろいろ根本的な原因を分析していないとかいろいろ批判が出ました。実はあれは委員会の中でも

すったもんだの議論があったわけです。本当は背景的要因が必要であると。根本的な原因は私も思いますけれども、非常に近視眼的な研究開発資源の配分政策です。競争的資金を獲得せよというのは非常に短期的な視点でしかなくない。それは抜本的な政府の政策の誤りであります。私から見ればですね。そういうことをちゃんと学会会議として言わなければいけない。ただ、あれを科学者行動規範委員会のところで言うてしまうと、自分たちの不祥事の責任を他に転嫁するみたいにとられますから、そのことはあの場ではやらない。そういう意味で分けたわけでありまして。今度の新会長がおっしゃってくださったように、別の形でぜひ今までもやってきたし、やるべきだというのは大いに賛成であります。

その問題とくっつけますと、学会会議のこれからの大きな存在理由の1つとしては、我々自身がレーティング機関になる。我々はただ外部からのレーティングに受動的に対応するだけではなくて、政府のさまざまな諸施策について科学者コミュニティとしてレーティングをしていく。そのための知恵はこの会員たちの中に私はさまざまあると思うんですね。科学者、何ですか、名称を私はすぐ忘れちゃいますが、両輪の1つだと言われた、科学者開発会議ですか、総合会議ですか、これは政府の研究開発資源配分政策に直接的な、より大きな影響力を持っているわけで、この会議に対してもう少し競争的であっていいと思います。余り歩み寄るだとか、助言をするとか、そういうスタンスをとる必要はありません。と私は思います。この研究開発資源配分というのは、先ほどの関係で出てきましたが、1つの大きなイシューですが、それだけでなく、環境政策、もろもろの問題があると思います。それについて本当にさまざまな分野のいわば知恵がここに凝集しているわけですから、レーティングシステムをいろんな形で立ち上げていくというのが私は今後の大きな課題ではないだろうか、一言感想を述べさせていただきます。

○議長 ありがとうございます。

学会会議のおもしろさはここにあるんですね。全く分野の違う方から非常に刺激的なお話をいただけるというのは財産でありますので、どうぞレスポンスしてください。

どうぞ。

○? 会員（名乗りなく、発言者名不明） 今の総合科学技術会議と車の両輪だということをしきりに言われるのですが、車の両輪であるからには両者がある方向、共通の方向を向いて進む。そのときの1つだと言いたいのだと思うのですが、総合科学技術会議の役割というのは非常に明確で、例えば第3期の科学技術基本計画を提出し、いろんな大型の科学研究費に対してA、B、Cのランキングをやるとか、幾つかの非常に明確なミッションが

ある。それは本当にそれが実行され、非常に大きな影響力を及ぼしている。そうすると、そういうことに対してどこが車の両輪であり得るのか。ぜひ私は新しい金澤会長に学術会議の本当の意味での役割、それは車の両輪と言うからには総合科学技術会議のファンクションを1つ明確にしなが、その未来イメージといいますか、そういう形で学術会議が本当に影響力が日本の学術に関して及ぼせるファンクションというものをぜひ明確にさせていただくこと。これが私は一番大事なのではないかと思ひます。

○議長 大変難しい御注文をいただきましたが、先ほど柘植先生もおっしゃいましたように、総合科学技術会議との関係というのは、私たちだけで勝手にこうだと言い切るわけにはいかない。相手のあることなんですね。ですから、これから、私はこういう職は初めてでございますから、1年生になったつもりで少し勉強させていただきますが、そういう中でおのずと恐らく明らかになっていくだろうと思ひますし、少なくとも私自身が信じられる形になっていって、そしてそれを恐らく皆様方にまたお話し申し上げる時期がくるだろうと思ひますが、今の段階であっても少なくともこれだけは言えるのではないかと思ひるのは、総合科学技術会議というのは翌年の科学技術政策についての具体的な政策を担っておられるということであって、当然ながら長いスパンでの議論も恐らくおやりになりたいのしょうけれども、とてもその余裕がないのだろうと思ひますね。ですから、そういう部分については学術会議が担う部分が当然ながらあるはずであります。少なくとも今の時点でさえそういうぐらひのことは思ひつきますので、全く同じ機能を持っているとは思ひておりませんので、必ずやお互いに相補う部分があると思ひています。恐らく本席委員もまた類似のことをお考えなのではないかと思ひますので、これからよく調整して、教えていただこうと思ひております。

それと、先ほど井上先生がおっしゃったことにちょっとレスポンスいたしますが、アカウンタビリティのお話、大変興味深く拝聴いたしました、似たようなことがいろいろなところでありまして、私はごく最近NIHの神経系のインスティテュートのナンバーツーのバグマンと話をする機会がありましたけれども、私たちは当然ですけれども、アメリカでも憲法でお金は1年間で、フィジカルイヤーでちゃんと使い切るようにということになっていると理解してました。もちろん日本でもそうなのですね。そちらでもそうらしいじゃないかと言ひましたら、つまり繰り越しができない、なかなか難しいという話です。彼は、政府が直接出すお金は確かにそうだと。けれども、一たん政府から出た金はそんなことないって言うんですね。物の考え方というのはなるほどこういうことでも違ひの

かと思って実は驚いた次第ですが、我々が本当に何を基準にしているのかというのはなかなか細かく一つ一つチェックしていかないとわからないものだなと思っております。

私が今申し上げた例が日本にすぐ当てはまるとも思えませんけれども、同じ人間の顔をしていながらそういう考え方を持っている人たちもいるということは大変私にとっては興味深いことであります。

これは単なる感想であります、何かほかに御意見ございますか。

どうぞ、矢野先生。

○矢野秀雄会員（第2部） 先ほど評価という話がありましたけれども、私は日本学術会議というのは評価をする集団としては最適だろうというふうに思っております。今、馬越先生——私も入っているのですが、ラウンドグループは研究評価ということをやろうと。恐らく研究評価をする上でこの学術会議というのはこれの右に出るものはないだろうと思います。研究評価だけと違って、私は組織評価、機関評価、そういうところまでも学術会議というのは対応しているのではないかと。総合科学技術会議は、逆に言うと、大型プロジェクトをどんどん出していますけれども、それを我々が評価するという立場にあっているのかなというふうに思っております。

○議長 ありがとうございます。

いかがですか。

どうぞ、柘植先生。

○柘植綾夫会員（第3部） 20期から入った会員として、今の先生と同じサポートですが、こういうふうに言う人もいますよ、昔の人は。そういうことが日本学術会議で、柘植さん、できませんよと。ですから、昔の日本学術会議の実態はそうだったのでしょう。我々はそれを実行すべきだと思うんです、今おっしゃったこと。ただし、できない。なぜならば、昔はできなかったからだという人たちがいるわけです。ウイットネスがですね。そこはやはり我々真摯に受けとめて、何でできなかったのか。それを破ればいいわけですね。そうしたらできます、必ず。おっしゃるとおり、この場ほど適切な場はないと思うんですね。ですから、ぜひともそういう形で、非常に批判的な、ネガティブな、否定的なことを言われている意見、しかもそれは昔の事実に基づいて言われていることがあるということは忘れないで、逆にそれをレッスンラウンドにして、ぜひポジティブに、私も今の意見に賛成であります。

○議長 ありがとうございます。

そういう話を聞いたことがおありの方は……。

どうぞ。

○今田高俊会員（第1部） ちょっと違った角度になるかもしれないのですが、この1年間新しい体制で組織づくりその他等々にかかわってきて、この学術会議って、ミッションというんですか、使命っていうのは、ほんと、何なのだろうというのをつくづく考えさせられるという状況だったんですけれどもね。財政の問題もさることながら、それ以上にこのミッションは科学者コミュニティーづくりみたいなものをつくって、関連する学協会と有機的な連携を図って、日本及び国際的学術の向上に資することというのがまず第1だと思うんですよね。そして、そのために国内外の国際的なものも含めて科学技術の政策的提言を行うということだと理解しているんですけれどもね。お金の話というのはそれとどうかかわるのだろうと。個別の具体的なクリエイティブな研究はそれぞれ皆さんそれぞれの分野でいろんなお金を取ってされているわけだから、やっぱり財政的な問題も、今言ったようなミッションに関連して、こういうことをやるからこれだけ予算を出してくれとかというふうに要求していかないと、何か少ないんだと。こんな少ない17~18億ぐらいでやれないよというのだと出してもらえないのではないかという、何やるんですかと言われて、いろいろやるんですというふうになってしまう可能性があるのも、もうちょっとミッションに関連した、要するにこういうプロジェクトで、こういうことをやるというふうに出して、そして予算要求その他をしていくというのが一応筋なんだろうなという印象を持っているんですけれどもね。

何かそういうことでいろいろ、もちろんこれまでもやられてこられているようですし、これからもいろいろあると思うんですけれども、要求するときのスタンスの問題というのをある程度固めておかないと、ほかとどう違うんですかという、さっきから総合科学技術会議みたいなもの、あつちはすごい日本の科学技術政策を向上させるための予算をお持ちのところで、そこと同じようなレベルで競争してもあんまりうまくいかないかなという感じもあって、井上さんがさっきおっしゃった知恵を出すという、そっちの方を少し特徴づけに出して、そのかわりお金ちょうだいという、そういう話がいいのではないかなと。そういう印象を受けました。

○議長 ありがとうございます。

そういう御意見でございますが……。

恐らく知恵はもちろん大事で、振興調整費のようなお金で一生懸命やって、成果を出し

て、こういうことをやったからということだろうと思います。こういうことをやるからではなくて、私は国立の組織に長いものですから、ある程度やったからそれに対してきちんと考えてほしいということが恐らく要求されるのだろうという気がしております。

いずれにしてもミッションをよく理解した上でやらなければいけないということは間違いないことですが、ほかにどうでしょうか。

どうぞ。

○広渡清吾会員（第1部） きょうの部会でも学術における人文社会科学の役割、あるいは学術会議における人文社会科学者の役割でもいいんですけども、そういう議論をしようということで、先ほど御紹介した合同の分科会で話をしていたのですが、役に立つ人文社会科学。工学や医学が役に立つということはだれしも認めていて、社会科学の一分野の法律学は役に立つということぐらいまでは認めて——経済学が役に立つかどうかはかなりまた問題だとか、そういう議論がいろいろありますけれど、人文学が役に立つというのはちょっとみんな「うん」っていうふうになるわけですけども、役に立つというコンセプトをどのように理解するかというのは実は学術の意義を考える上で非常に重要だというような話だろうと思うんですね。

私は、車の両輪論というのは、吉川先生が発明されたコンセプトで非常に上手な、でも、先生はいつも笑いながらそれをおっしゃって、あそこで図をかいて説明になるときに大きな輪と小さな輪をかいたり、ハンドルが逆向きになっているものを出してみたりということで、これはパラドキシカルなコンセプトなんだということを私は言外におっしゃっているのではないかと。つまり、学術会議が内閣府に属して、総合科学技術会議と日本学術会議は同じ所管のもとにある。それも行政に対して科学の役割を果たすための機関が2つある。2つ並立している機関をどう説明するかということになりますと、それはまあ両輪というしかないのではないかとということを出てきているコンセプトであって、これはだからそのままそれを文字どおり受けとめますと、本当に前向きに、同じ目標に向かって2つの輪がいかなければいけないのではないかとか、そういう議論になりがちだと思うんですが、私はそこはさまざまな多様なあり方で問題は考えなければいけないのではないかとこのように思います。

学問の目的も分野によっていろいろでしょうし、科学と技術というものがどう関係しているかということについても、外部評価のときにもある委員の先生は科学と技術というものについての位置づけを明確にする必要があると。技術が役に立たなければならぬとい

うことはもとより自明のことであるけれども、科学というのは技術と違った位置づけができる、そういう役割を持つものであると。こういう議論をもっと私は学術会議の中でやる必要があるのではないかと。そのためには人文学や社会科学がもう少し発言をしなくてはいけない。総会で第1部の会員が発言する発言の回数は非常に少ないのではないかと思っ
て、ちょっと気にしているところもあるのですけれども、科学は諸科学でありますから、学術会議ではサイエンスだけではなくて、アート——これも議論になったのですが、文学はサイエンスなのか。アートとおっしゃっている先生方もいらっしゃいますし、文学関係の学問にピアレビュー的な研究評価はなじまないという報告書も学術会議の中であるわけですね。ですから、そういうことも含めて多様なあり方を学術会議の中でどう総合して社会に対して発信していくかということは私は重要なのではないかと。

ですから、時代接合的な、順接的に時代に接合する学問のあり方もあるし、全く逆接的にしか時代に接合しない学問のあり方もあるし、それから非常に俯瞰的に学問のあり方を見詰める学問のあり方もあるし、そういうものを総合して人類の長い歴史の中で学術が果たす役割というものを考えるということがやはり基本に学術会議の使命の中にあるのではないかと。

しかし、学術会議法はもっと直截に行政に科学を浸透させること、そのために科学者が連携を図ってコミュニケーションすることというふうに明確に書かれていますから、それは実際の今の社会に学術会議が貢献しなければならないことはもとよりですが、貢献するためにはそういう多様な学術についてのコンセプトを前提にして学術会議の会員が活動するということが重要なのではないかと。そのあたりのことをもっと広くリアルな条件も含めて議論していこうというのが実は考えております学術における人文社会学の役割についての検討のイメージかなと思っております。

○議長 ありがとうございます。

井上さんにしても今田さんにしても文系の第1部の方から御発言いただいたのは大変ありがたく思っていたところなので、今の御発言、大変ありがたくと思います。

どうぞ。

○伊藤早苗会員（第3部） いろいろな話で、話が幾つかまざってきたと思うので、私の頭の整理をするために、これでよろしいのか、金澤議長にお聞きしたいと思うんでございますけれど、まず皆様のコンセンサスは観念的なところである程度いわゆる知恵を使った実績を示さなければならない。それは例えば長期スパンであれ、短期スパンであれ、そう

ということがレゾナードルを示すものである。そういうことは皆さん観念的には賛成なき
っていると思うんです。そのときに、例えばお金をもらうのにこびへつらう必要性はなく
て——どういうふうにもらうかというのは別として、どうにかしてしっかり自分の成果を
出して、実績を積んで、それで大きなものへ持っていきたい。今私はわざと大きなものへ
と申しましたけれど、金澤議長が一番最初にちょろっとおっしゃったのは、海部部長もお
っしゃいましたけれど、変な、いわゆるスパイラルダウンみたいなところにいるとき
に、どうやって上向きにするか。つまりワンステップ、最初のステップをするのにどん
なに小さくてもいい、何かの実績を示さなくてはいけない。そのためにはプラクティカル
な、例えば小さなお金でも何かをやっていかななくてはいけない。そういうことのために先
ほど例えば北澤さんがおっしゃったように、何か1つの 이슈を決めて、ちょっとでも
いいからステップを大きくするためのワンステップフォワードしておかないと、実績を示
すことができない。何かそんなようなふうに、今からワンステップ出るところのワンステ
ップフォワードのプラクティカルな面と、非常に長期スパンの観念的な精神論とが今大分
そういうふうにまざってきたと思われるのですけれど、この考え方でよろしいのでしょ
うか。

○議長 確かにそのとおりだと思います。まじってきていると思います。

ただ、私のイメージにありますワンステップフォワードのツールとしては、やはり振興
調整費というのは非常に大きい位置を占めています。これは学術会議が本来的にフィジカ
ルイヤーでいただくお金の中では恐らくできる規模ではないだろうと思うんですが、そう
いうことを申しますのは、多分アンケートを含めた相当な調査をしなくてはいけないんだ
と思うんですね。学術会議がこういう調査ができると。やる実力と言っていいかな、そう
いう行動がとれるようになったのだというふうに見ていただくことが極めて大事なことで、
しかもその後ろには総合科学技術会議がおられて、それをうまく利用していく装置もでき
ているということであれば、いい方のスパイラルが作動するのではないかと理解している
わけです。

それと精神論的な、そういうのを横から見ている、企業の方々にも御参加いただけるよ
うなシステムをつくるというのはちょっと間にギャップがあります。もちろんです、そこ
は。

ほかにはいかがでしょうか。

どうぞ、柘植先生。

○柘植綾夫会員（第3部） 今のお二方の話でぜひ、私はさっき舌足らずで伝わっていなかったかもしれませんが、ワンステップという話の、そういうとらまえ方ではなくて、先ほど1例と言いましたけれども、岡田先生が始めて評価の面ですごくいい研究をされて、それを馬越先生がここの、総合科学技術会議ではなくて、学術会議の場としての掘り下げを始めようとしているとか、あるいはイノベーションというものに対して学術会議としてはどう考えるのだと。今の総合科学技術会議が考えていることのアファーマティブな部分の具体性もあるし、それは間違っていると、ここは欠けているということとか、あるいは海部先生が始められていますビッグサイエンスを支えるもの、これが私は行政側で見ると今は欠陥があると思うんですね。それはここの場がしていく。つまり、申し上げたいのは、そういう我々が今すべきことというのをアイテムイズして、それをプライオリティーをつけなければいけません。並べてみると、ワンステップ、短期的な話もあるし、長い時間かけてやらなければいけませんものもあるし、恐らく最低5つぐらいのアジェンダですね。10個ぐらいあると思います。たくさんあるけれども、5つかのアジェンダで短期、長期があると思いますので、そこを執行部の方針でもあり、我々会員の一つ一つの持ち場のアクションにもなるという、そういう構造をつくっていくことだと思いますね。

○議長 ありがとうございます。

実はそういうアイテムを幾つか考えてはいるのですが、その中の1つがビッグサイエンスのあり方でありまして、選び方といいましようかね、選定のされ方、これは海部先生がおっしゃっていたことでもあるのですが、実は19期からの積み残しの問題でもあるんですね。これは結局大きな、100億を超える、あるいはもっと大きなものが決まっていく過程というのが恐らく一握りの人しかわからないというような現状がございます。それでは科学者、研究者は納得できないわけですね。全員が納得するのは難しいかもしれませんが、多くの方が納得できるような形で、クリアな形で選ばれていくべきであろうと思いますし、それには学術会議は相当の努力をする必要があろうと思っていますので、それが1つですし、また、これは今議論が進んでいるかと思いますが、アーカイブスの問題もあろうか思います。いろいろあるわけですが、それはこれからまた皆さん方と議論しながら選んでいくべきものかなと思っています。

では、土居先生が最初で、次に井上先生。

○土居範久会員（第3部） 先ほどの1つ前の柘植先生がおっしゃった学術会議に何かできっこないということに立ち戻ってよろしいですか。

○議長 どうぞ。

○土居範久会員（第3部） 会長が事例をとということで、化石のようなことではないので、深いところは知りませんが、16期から私は会員であったということで、もう一方、あそこに16期からの山下先生がいらっしゃいますが、16、17、18期という、結局その間及びその前のところではある意味において時代ということもあったかと思いますが、何かを評価するというような、そういうようなことは動きがなかったのだと思うんです。

もちろん総合科学技術会議もできておりませんし、科学技術会議があったわけですが、その科学技術会議などとは特段何かをとというようなこともあったわけではございませんし、科学技術基本法、あれは議員立法ですが、議員立法でかけられる前にはこの総会の場にかかけられまして、これでいいかという相談もございました。「科学技術とは」というので、括弧、人文科学のみのものをというのは、そのときからあれになったわけですが、「のみのもの」というのがあったりというような、いろいろな経緯があったりもしましたし、16期の伊藤会長が提案された戦略研究というのは、結局霞が関でも取り上げられておりますし、その後、吉川会長が提案されました俯瞰型研究というのは、これはいろいろな面で俯瞰型という言葉が出ていっているわけで、俯瞰型研究そのものがどうなったかということに関しましては、ストラテジック・リサーチというようなことほどではない。ですが、それから先は不幸なことに行政機関の1つなものですから、行政改革のまないたの上ののってしまって、それで総合科学技術会議ができてすぐからまないたの上にあったものですから、要するに総合科学技術会議をどうのこうのというようなあれではなかった。

というようなことがありまして今になってきているわけですし、その間、要するにあつちでも評価、こっちでも評価、何でも評価というようなことで、決していいあれではないと思うんですが、決していいどころか悪い方向に進んでいるのだと思っておりますけれども、そういうことですので、恐らくどなたかが個人的に何かおっしゃっているだけの話であらうかと思しますので、この場として先ほどの吉川先生の言葉でいきますと、俯瞰型ということをやろうとしますと最適な場でございますから、したがって、いろいろなことの評価に向けては、これだけ1部から7部までというのが昔からのあれですが、人文社会から自然工学、医学までという皆さん方がそろっている場ですから、いろいろな観点から切り込めるということで、ぜひそういう面に向かっては我々が出ていく1つだと。そのように考えております。

○議長 ありがとうございます。

では、井上さん、どうぞ。

○井上達夫会員（第1部） 簡単に申します。先ほど私はかなり一般論を言いましたので、具体的な話を少し補わせていただきます。

今すぐやろうと思ったらできることですね。それは、先ほど私は政府が評価するのではなくて、政府を評価するというのが本来のアカウンタビリティだと。ところが、そうっていないと言いました。

とりあえず研究開発資源配分政策について言うと、いろいろな問題を皆さんお持ちだと思えますけれども、これについてイデオロギー的な議論をしても余り意味がないと思えます。過去にちょっと不幸なことがいろいろ学術会議についてあって、イデオロギー偏向性をつつかれて、その結果余り建設的に受けとめられないということもあったと思えます。

ですから、私が言っているのは別に昔に戻れということではありませんで、そういうイデオロギー的の偏向と言われたいような客観的なデータを突きつけることだと思います。それについて私は非常に意を強くいたしましたのは、今回科学者行動規範委員会の案についてさまざまな関連機関にアンケートを依頼したときに回答率が非常に高かった。現場の声を我々は学術会議が主催してこういうことをやった場合にはくみ上げる機構を既に持っているわけですね。学術会議の先進的な権威ということもあると思えますし、ある種の党派性を超えた中立的な客観性を持った機関としての信頼をそれなりに得ているのだろうと思うんですね。

今、研究開発資源配分政策だけではありませんが、およそ政策について、それをレーティングシステムを立ち上げるのに何が重要かという、その帰結のアセスメントなんですよ。政策を次々変えるけれど、帰結をちゃんと吟味しない。だから、だれも責任をとらない。ひどい話なんですね。私は、研究開発資源配分政策、現在とられている政策の結果、さまざまな研究の現場でどんな悲鳴が上がっているか。このデータを私は系統的に集めることは我々はそれほどお金をかけなくても、今回の科学者行動規範についてやったのと同じようなやり方ですぐやる気になればできることだと思います。

例えば具体的な例を言うと、私の研究機関でもCOEを2つ持っていますけれども、外部に拠点をつくれというわけで、100万円、月に払って、5年間で6000万なんですよ。家賃だけで。ところが、基本的な雑誌を切り詰めているという現状ですね。これに似たような話はいろんなところであると思うんです。こういう具体的な、こんなことやっていて本当に日本の学術の将来、どうなるのでしょうかということデータを突きつけていく。

こういうことは私はお金などなくてもできることだと思います。これは1つ具体的な例として申し上げたいと思います。

○議長 ありがとうございます。

大変力強いお話です。

どうぞ、毛利さん。

○毛利衛会員（第3部） 組織として学術会議が大きくなること、組織の中に委員会があって、社会に影響を持つということもあるのですけれども、私は今もっと具体的に私たちができることを少し述べてみたいと思います。

御存じのようにことしの4月、科学技術週間のときにサイエンスカフェという試みを初めて行いました。この学術会議というのはそれぞれの方々がそれぞれ深い研究をされて選ばれてきている集団ですけれども、しかし、この学術会議という組織の中では1つの大きな学術会議というものを動かすということなわけですね。しかし、対社会という、我々の存在の何か——先ほど役に立つという言葉があったのですが、私たちの存在自身をもっと社会に何かできるということから始めるということも1つアプローチがあるのかなと思います。

具体的に言いますと、皆さんのお手元に「サイエンスカフェ講師登録票」というのがあるんですね。皆さんはそれぞれ非常に深い研究でオリジナリティーを持っています。チャンスはあります。しかし、今210名の中でサイエンスカフェをされた方は、あるいはまた登録されている方は十数名です。まず私たち自身が学術会議にボランティアで入っているわけですね。そうすると、私たち自身が社会に対して何かをするという、組織の大きなのではなくて、個として何かアクションをできるのではないかということも1つの大事な学術会議の役割ではないかと思います。

お持ちしております。

○議長 どうもありがとうございます。

ぜひ積極的なノミネーションをお願いしたいと思います。

ほかにかがでしょうか。

では、鈴木さんを先にして、次に北澤さんにしましょう。

○鈴木興太郎会員（第1部） ちょっと前に上がった論点に戻ってしまうことになるかもしれません。私は前から吉川元会長の車の両輪論というのは実はかなり違和感を持っておりました。とりわけ学術会議みたいな組織で車の両輪に位置づけるということが本当に生

産的かどうかということに疑問があったからであります。

なぜそういうことを申しますかという、例えば学術会議においてある種の目的を共有したとしても、そのための手段というのはやっぱりやってみなければわからないという側面も確かにあるわけですし、試みようとする際に自分たちが一番いいと思う方法でやってみたいと。そういう思いはそれぞれのディシプリンを背景として多分具体的な姿としては違ってくると思うんです。経済学が役に立つかどうか、同僚が疑っていますけれども、たまには役に立つということを言いたくてこういう発言をしているのですが、なぜかという、経済学者というのは、例えば競争というものに非常に信頼感を持っているわけです。競争というのは失敗もするだろうけれども、競争の中でサバイブしていくためには、最終的には自分のよさを証明したものが生き残っていく。よさを証明するものがまさに競争のプロセスなわけですから、結局実験を重ねながらいい方法を発見していく。そのためには手段に関する合意を持たないものが同乗している車で、右の車輪の方は実は全く違う原理で動いているという車では走れない。しかし、目的を共有していれば、やがてはターゲットに対して自分がどの程度効率性を持って、あるいは公平性を持ってその目的を達成できたかということで、自分たちの持っているディシプリンの役に立つということを証明できる。それが競争のプロセスだというふうに考えているわけです。

そこで、学術会議みたいな組織は、せっかく違うディシプリンが一緒に集まって何かをやろうとするのに、手段に関してまで何も無理に1つの車に乗せる必要はない。そうではなくて、自由に走り回って、しかし、ターゲットに関しての目標をシェアできるかどうかということを議論するということが必要なのではないか。私はその点を非常に強く感じているわけであります。

それから、役に立つ。これはやっぱり時間の次元にもよるわけでありまして、先ほど議長の方でもおっしゃいましたけれども、例えばタイムスパンに関して長期的に見るのか、短期的に見るのかということもありますし、それから成果ではなくて、途中で何をやって、そこで知を発見しながらいくかというプロセス自体にも価値があるのが社会的な実験の意味だと思います。

だからそういう点も含めて、学術会議は違う知の持ち主たちが共有する価値のために努力し合うという組織であってほしいというふうに私は思います。

○議長 大変ありがとうございます。

北澤先生のお話しになる前に、ちょっと一言、今のお話をサポートさせてもらいたいので

ですが、学術会議から出る提言、あるいは報告の最も信頼がおける理由は、違う分野の方々が同じテーマに対して無理やりにも議論をなされた結果であるということだと私は思っているんです。そういう意味で、今鈴木先生がおっしゃったとおりなので、どうか課題別委員会その他、違う分野の方々が一緒に議論なさるときは、できれば人数もそんなに変わらない形でしっかり議論していただいて、その成果を出していただきたいなと実は思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは、北澤先生、どうぞ。

○北澤宏一会員（第3部） 今の話を逆の側から見るような話になるのですが、実は私は柘植先生と一緒に学術会議の中にイノベーション力強化委員会というのをつくりまして、その委員長を今やらされているのですが、日々柘植先生と学術会議の多くの委員の方との温度差の中であつたまったり、冷めたりしてやっている。そういう立場からお話しすることになるのですが、ちょっと引き下がって国民の立場から見ますと、総合科学技術会議は常に日本の政策をこうする、ああするということで前線に立って戦っていただいて、そして、その次に向かつての道を切り開いていっていただくという、これが総合科学技術会議に国民が期待している、そういうことかなと思ひわけです。

学術会議がそこに一緒になってはせ参じて、そこで一緒に戦っていただくというふうには国民は思っていないだろうと。私はむしろ学術会議は後ろにでーんと構えていて、いざ困ったことが起きたとき、あるいは国が道を誤りそうなときに、動かざること山のごとのように構えていていただいて、そこから何か良心の水がほとばしり出てくるような、そんな山であつてほしいというような、そんな気持ちを抱いているわけですが、そのときに、しかし、総合科学技術会議自身も実は人材は同じところから出ているので、人材はお互いに共有し合っている。そして、それを決定するプロセスみたいなものが両者非常に違つていて、それで協力するというときにも一緒になって前線で戦うわけではないという、その辺が難しい部分かなというふうには思っているのですけれども……。

○議長 ありがとうございます。

実は5分前に高市大臣が霞が関をお出になりましたというメモが届きました。多分あと5分以内にお着きになるのだらうと思ひますが、途中で議論を終わらせざるを得ない状況でありますけれども、そこを恐縮ですが、御理解の上、もうちょっと御意見をいただきたいと思ひますが、いかがでしょうか。

ちょっと済みません。——いや、履歴が書いてありまして、年齢まで書いてあるので、

こんなこと、読むのかと言って今聞いたんです。そうではないということがわかりましたので、ほっとしました。

どうでしょうか。議論に戻りましょう。

どうぞ、海部先生。

○海部宣男会員（第3部） それでは、手短かに申し上げますが、いろいろ非常に有益な議論をいただいて啓発される場所が多いのですけれども、車の両輪論のことは余り議論する必要は私はないと思うんですが、私の非常に率直な印象を申し上げますと、私は学会議とか総合科学技術会議とか、組織のことで余りこだわりたくないというのが正直言っているんです。学会議でなぜ学会議のことを一生懸命やらなければいけないかと思うかということ、それは日本で、科学というか、学術というか、アカデミーが日本の社会にどのような役割を果たすかということの大事さにあると思うんですね。それについてはいろいろな立場のことを先生方おっしゃいました。そのとおりだと思います。日本においてやはりそれは希薄である。日本のアカデミー、学者が日本の社会にどれだけの役割を果たしているかという点で言うと、やはり日本は見劣りすると思います。非常に見劣りすると思います。それをどうすればいいかということ考えたときに、学会議が一番いい場所なんです、今。これがうまく機能しないようでは、日本では科学者が社会に対して役割を果たしていくことはできないのではないかなという、そういう思いが非常にあります。

そういう意味で、別に乗り物に何が乗っているとか、軸が一緒だとか、そういう話ではなくて、日本という社会を乗せて科学者として走るというときに、一輪であるということ私は非常に重要なことだというふうに、そんなふうに思うということが1つです。

それと関連して、先ほど評価の話がいろいろありました。昔は学会議では評価できないという話、ああそうかと思って聞いていたのですが、それは私もいろいろ評価のことで苦勞しましたが、日本の文化にはもともと研究を評価するという文化はありませんでした。と思います。私はそういうふうに認識しております。実際に評価ということをはじめた非常に初期のころにそれを痛感しているんですね。大学へ行って評価をしようとする、先生方、本当によろいを着て待っているわけですね。評価されるのも嫌い。するというときに時間を割くなんていうことはしたくない。という文化であったのではないかと思います。それがこここのところ物すごく変わってきて、アメリカ式のやり方がどんどん導入されて、アメリカの方は実はヨーロッパのイギリスから始まるサイエンスの非常に重厚な400年の歴史があって、その中でソサエティーができ、みずから評価をしという評価の文

化をつくり上げてきた。それを表面だけまねしたものですから、評価が必要だということで、何かお金を出す省庁側が評価するなんていうとんでもない話になったわけです。研究をお金を出す側が評価するというのは、これは世界で日本ぐらいなものではないかと私は——ほかにあるかもしれません。非常にびっくりしております。

そういうとんでもないことに今私たちは突っ込んでしまっているわけですが、しかし、その中で1つポジティブなことは評価というのはやっぱりしなければいけないということは我々みんなが学んだことだと思います。それは研究は研究者が評価しなければだれがやってくれる。それが今私たちが陥っている状況ですから、やはり私たちが責任を持って評価する。そのことに努力を投じる必要があるということは非常に共通の認識になってきたのは私は大変プラスだと思います。

そこで、先ほどまで議論があるのように、では、どこが本当にやるのかと。例えば計画を立てたら、ビッグプロジェクトを立てたら、それを立てたある省のある課が関係の先生方を選んできて、そこで思っているような評価を出していただくというのが評価なのか、それともアカデミックにしっかりした第三者、あるいはいろんな分野の先生方がしっかり評価するようなシステムを学会が構築できるかという、そういう問題であろうと思うんです。私は、それは学会がやらなければ、当分日本にはそういう評価の文化は根づかないだろうと思いますので、そんなふうな印象を持っております。

○議長 ありがとうございます。

ほかに御意見ございますでしょうか。

結局評価をやるにしても研究者がやらなければいけないことになりますね。あるいは各省庁が審議会を設けていろいろ施策を練っていきますね。そういう委員にもまた研究者が選ばれていくのだらうと思います。そういう中に多分学会の会員の方々が恐らく含まれていくのだらうと思いますけれども、各省庁が勝手にと言うといけませんけれども、選ぶのではなくて、我々の方がこういう方がどうだらうかというようなことを言える時代が来ればいいなと実は思っております。

扉があきましたので、多分お見えになったのですか。——駐車場にお着きになったということでございます。

それでは、途中ではありますけれども、高市大臣がお見えになりましたので、自由討論はここまでということにさせていただきますして、本日の議論はすべて終了したことにさせていただきますたいと思います。

ただいまいただきました御議論は大変ありがたく思います。これからの方針を決める上で大変ありがたいお話ばかりでございましたので、役に立たせていただきたいと思います。

高市早苗内閣府特命担当大臣御挨拶

○議長 それでは、高市大臣がお見えになりましたので……。 (拍手)

それでは、御紹介させていただきます。

高市大臣は、先月末の組閣におきまして沖縄及び北方対策、科学技術政策、イノベーション、少子化・男女共同参画及び食品安全と、大変なたくさんの方のことを御担当になる内閣府特命担当大臣に御就任になりました。

本日は国会会期中で大変お忙しい中をこの日本学術会議総会のために駆けつけていただきました。

それでは、大臣より御挨拶をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

○高市早苗内閣府特命担当大臣 皆様、こんにちは。

本日は、総会の御盛会、おめでとうございます。

今、新会長様にうれしい御紹介をいただきました高市早苗でございます。

私自身は国会での先生方のお仕事と関係のある分野では科学技術委員会の筆頭理事を2年生議員のときにやりまして、その後、衆議院の文部科学委員長、それから経済産業省の副大臣と務めまして、このたび、内閣府にやってまいりました。特に科学技術の担当、それから今回イノベーション担当大臣というのを安倍総理が新設されました。こういった分野で大変先生方にこれからお世話になることかと思いますが、どうかよろしく願いいたします。

昨年、先生方におかれましては、20年ぶりの大改革ということで、非常に新しい課題にも、それからいろいろ横断的な課題にも迅速に取り組める体制をつくっていただいたと聞いております。

特にG8サミットに向けました各国学術会議の共同声明でございますとか、また政府統計に関します提言など、早速大きな御活躍をいただいておりますし、また、今般科学者の行動規範、今非常に注目を浴びておりますが、こういった点でも取り組みをしていただいているということで、思い切った改革の成果が確実に表に出てきていることかと思っております。

安倍総理が所信表明演説をされました。内容は既に広く報道されておりますけれども、

その中で、1つは、国際会議、これをアジア最大の開催国という地位を日本が確立するために、今後主要国際会議の開催件数5割以上にしたいんだという思いを訴えられました。これは先生方が国際的な活動を強化するというので、早急に取り組むべき課題として考えていただいていることにも大きく関係があると思います。

それから、このたび私が新しく着任しましたというか、ピカピカの役職であります、イノベーション担当大臣ということで、非常に急いで作業をしなければいけなくなっております。来年の2月までには2025年に目指すべき姿、概念、理念を取りまとめて、5月、6月にはそれぞれの分野におけるイノベーション日本の姿、つまり政策的な目標を具体化しなければいけないということでございますが、この中でも先生方が世論の啓発をしようという目標を据えていただいている。ここが大きくかかわってくる部分なのだろうと思います。つまり、新聞でもイノベーションって何って、全然わかんないよと答えられた国民が7割を超えているという残念な記事が出ておりました。科学技術ということに限らず、イノベーションというものに取り組んでいったら、例えば障害者の方にも、高齢者の方にも、働くお父さんやお母さんにもとても便利な生活が待っている。バリアフリーな生活が待っている。犯罪対策にも役に立つ。そして、医学、医薬の分野でも非常に大きな進歩がある。何か国民に見えやすい、まさに先生方がこの会議と国民生活を密接に関連させるような広報活動、啓蒙活動、これを計画していただいているということでございますので、大いにお知恵をおかりしたいと思っております。

きょうは新しく金澤先生が会長に御就任されまして、今入ってきておめでとうございませうと言ったら、めでたくないよとおっしゃっていたのですが、そうおっしゃらずに大きな御活躍をお願い申し上げます。

そしてまた、黒川先生にも大変な御活躍をいただきました。心から感謝申し上げますとともに、先生方もまるごとこれから内閣府の政策にもお知恵をちょうだいしたいと思いますので、末長い御指導をお願いいたします。

本当に御盛会、おめでとうございました。きょうはありがとうございました。(拍手)
○議長 どうも高市大臣、まことにお忙しいところ、科学者コミュニティの代表機関であります学術会議においでいただきまして激励の言葉、ありがとうございました。御期待に添えるよう頑張りますので、会員とともによろしく願いいたします。

どうもありがとうございました。(拍手)

事務連絡

○會田企画課長 それでは、本日はありがとうございました。

この後、5時半から幹事会がございますが、明日は10時から総会がございますので、よろしく願いいたします。

午後5時24分散会

第149回総会速記録

平成18年10月3日

日本学術会議

平成18年10月3日

於・日本学術会議講堂

第149回総会速記録

(第2日)

日本学術会議

目 次

1、再開 午前10時00分	1
1、前副会長の辞任報告	
新副会長の指名	2
1、新副会長就任挨拶	3
1、前副会長退任挨拶	6
1、そ の 他	8
〔ロバート・メイ卿特別講演（速記なし）〕	
1、提1 補欠の会員候補者の承認について	
提2 日本学術会議細則の一部を改正する決定案について	
提3 「科学者の行動規範について（声明）」（案）について	10
1、事務連絡	14
1、閉会 午後2時52分	14

午前10時00分再開

○議長（金澤会長） 皆さん、おはようございます。

時間になりましたので、それから定数に達しましたので、3分ほど前で107だったと思います。成立しておりますので、始めたいと思います。

本日の総会日程につきましてまずは御説明いたしますが、これまでの副会長の先生方が辞任なさいましたので、新しい副会長を御指名させていただきたいと思います。指名させていただきました3名の方にはこの総会の席上で同意を得ることになっておりますので、よろしくお願ひしたいと思います。新副会長からは就任の御挨拶、それから今までの副会長からは御退任の御挨拶をいただくことにしております。

その後、各部会をきのうと同じ場所におきまして開催していただきます。予定としては10時半をめぐり考えておりますが、さらにその後、午後であります、再びここにお集まりいただきまして、ロバート・メイ卿、ロード・メイ・オブ・オックスフォードというのだそうではありますが、特別講演を予定しております。

その後は、昨日、組織制度担当副会長から御説明のありました補欠会員候補者の決定及び日本学術会議細則の審議、採択などを予定しております。

その後、さらに各機能別委員会を開きまして、夕刻には懇親会が予定されておりますので、よろしくお願ひしたいと思います。

副会長の選出に入ります前に1つ、けさの新聞を見ておきまして、ちょっと妙なことが書いてありましたのでコメントさせていただきますが、前会長の黒川先生は国際派で、私は国内のことを何とかって、そう間違いではないのですけれども、なぜあんなことをちょっと御説明したいと思うんですが、こういう質問があったんです。

それは黒川先生は、日本の大学は大相撲制でなければいかんとおっしゃっていると言うんですね。それについてどう思うかという質問でございますが、御承知と申しますけれども、大相撲は国技であるけれども、外国の方が非常に活潑なさっています。恐らくそういうことを黒川先生は多として、日本の大学も外国の方がどんどん活躍する場になってほしいという思いなんだろうと思います。

ただ、一方で、御承知と申しますけれども、日本に來られた現役の研究者、あるいは学

生さんたちが日本の風土に必ずしもすぐフィットすることが難しく、本国に帰られてから必ずしもいい評判をお持ち帰りいただけないということがあるということをよく聞くのであります。私はむしろそういうことは大変結構だけれども、むしろそういう生活面を含めたインフラストラクチャーをきちんとすることも同時に大事であるということをつもりです。それが国内派になってしまったわけでありましたが、いずれにしても誤解していただきたくないなので、一言だけ申しました。

前副会長の辞任報告

新副会長の指名

○議長 さて、それでは副会長の辞任なされた御報告をいたします。

昨日、幹事会の終了後に浅島誠第2部会員・組織運営担当副会長、大垣眞一郎第3部会員・政府等の関係担当副会長、それから石倉洋子第1部会員・国際活動担当副会長のお三方から副会長の辞任の申し出がございまして、これを幹事会として承認した次第でございます。

それに基づきまして、副会長の指名をいたしたいと思っております。

なお、これは日本学術会議法第8条第1項の規定によりまして、副会長3名を置くことと規定されていることに従うわけでありまして、またその選出に関しましては、日本学術会議法第8条第3項の規定によりまして、副会長は会員のうちから総会の同意を得て会長が指名すると規定されている項目によるのでございます。

この副会長の職務につきましては、この後で採択いたします予定の日本学術会議会則第4条の規定によりまして、次の3つの事項をつかさどることになっております。

第1が、日本学術会議の組織運営及び科学者間の連携に関すること。今まで浅島先生が担当してございまして。

2番目は、日本学術会議と政府、社会及び国民等との関係に関すること。これは今までは大垣眞一郎先生が御担当でございました。

3つ目が、日本学術会議の国際的対応に関することでありまして、今までは石倉洋子先生が御担当でございました。

以上の3つの項目を踏まえました上で、次の3人の方を副会長に御指名したいと存じます。

まず1番目の日本学術会議の組織運営及び科学者間の連携に関することにつきましては、大変申しわけないのでありますが、浅島先生に留任していただきたいと思っております、浅島先生を御指名させていただきます。

2番目の日本学術会議と政府、社会及び国民等との関係に関する事項に関しましての副会長は鈴木興太郎先生を御指名したいと存じます。第1部でございます。

3番目の日本学術会議の国際的対応に関することにつきましては、第3部の土居範久先生を御指名させていただきたいと存じます。

いかがでございましょうか。

〔拍 手〕

○議長 どうもありがとうございました。

それでは、第20期日本学術会議の副会長につきましては以上の3名の方に決定いたしました。

新副会長就任挨拶

○議長 それでは、引き続きまして、ただいまの3名の方々に御挨拶をいただきたいと思いますが、こちらにお見えいただけますでしょうか。

それでは、先ほどの1番、2番、3番の順番でいきましょう。

では、浅島先生からどうぞ御挨拶をお願いいたします。

○浅島副会長 浅島です。

私、1年間、黒川前会長のもとで執行部をやりましたので、実は晴れ晴れとした気持ちでここに臨みかけたのですけれども、いろんな問題があるから、おまえ、やれということなので、引き受けざるを得なかったというのが実情でございます。

私、実を申し上げますと、この1年間、学術会議で3年分働いたかなと思っていて、教育と研究の現場に戻ることを切に希望していたわけでございますけれども、まだまだ学術会議が20期という非常に重要な時期にありまして、制度をいろいろな意味で整えていかなければならないということがわかっていましたので、どうしても今までの学術会議と違った新生学術会議をうまく走らせるためには、金澤新会長のもとで、微力ではありますがけれども尽くしたいと思っておりますので、どうぞよろしくをお願いいたします。(拍手)

○議長 どうもありがとうございました。

それでは、続きまして鈴木興太郎先生、お願いいたします。

○鈴木副会長 鈴木でございます。

金澤会長の御指名と皆様の御同意によりまして、図らずも第 20 期日本学術会議の副会長の重責を担うということになりました。

数年前、私が第 18 期の会員の任期を終えた日にはもうこの学術会議の建物に入ることはないだろうと思っていたのでございますけれど、新生学術会議が立ち上がりまして、会員に選出された折には日本のサイエンスコミュニティーの健全な成熟にもう 1 度希望を託す思いでお引き受けいたしました。

黒川前会長の強力なリーダーシップのもとで新たに大組織が誕生したわけでありまして、その中でこういう重責を担うことになったというのは全く想定外のことでございました。自分の非力を知っておりますだけに、非常に内心じくじたるものがございますけれども、これも自分の学者人生の中のめぐり合わせで、日本のサイエンスコミュニティーのために微力を尽くすというのも自分の 1 つの運と考えて、金澤会長を全力を挙げて誠実に支えてまいりたいと思っております。

私に指定されました職責の重要な一面というのは、学術会議と政府、社会、国民との間のインターフェースを健全に成熟させていくということのようでございます。ふなれを言いわけにせず、また権威や権力にこびずに、皆様の叱咤と激励を受けて誠意を尽くして務めてまいりたいと思っております。

もう一言つけ加えさせていただきますと、私は経済学、とりわけ制度の批判的な評価とその理性的な設計ということにかかわる厚生経済学の研究者であります。その意味から言うところ、こういう第 1 部、第 2 部、第 3 部、大組織であると同時にさまざまな異質性と背景にそれぞれ確かなディシプリンをお持ちの方々の組織がまとまって一体日本のサイエンスコミュニティーと国民のために何ができるか。こういう組織をいかにして機能させていくかということは自分にとっての学問的な関心でもあると思っております。これが副会長の職務とどうかかわるのかはさっぱり見えておりませんが、そういうつもりも持って誠実に務めてまいります。

どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

○議長 ありがとうございます。

それでは、土居先生、よろしく申し上げます。

○土居副会長 土居でございます。

金澤会長の御指名と皆様方の御同意を得て、副会長の重責を務めさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

実は何度か申し上げたことがあろうかとも思いますが、17期の改革から運営審議会の中で17期、18期とすべて目の前でと申しますか、参加してやってまいりました上に、18期で当時の法律からいきますと3期9年というのが定年だったものですから、そこで終えたつもりだったのですが、19期のときには黒川会長から在り方委員会に入れということの御指名でございまして、そこで改革に際しての制度、学術会議の在り方をそれこそかなりの時間を費やして、日によりますと4時間から5時間使って、何回もそれを繰り返してやってきたというような経緯がございます。そういうようなことを踏まえまして、ある意味において一番長くそういうことにかかわってまいりましたものですから、長ければいいというものでもないのですが、重々新生学術会議に関しましてはどのようにすべきかということは十二分に承知しているつもりでございまして、金澤会長のもとでできるだけ早く活動を、前期まで以上に再開すると言っておかしいのですが、始めまして、この後、待ち受けております総合科学技術会議の評価を乗り切らなければいけないというようなつもりでおります。

また、担当が、これが何とも言えない難しい国際担当だということございまして、これこそ本当に晴天のへきれきでございまして、この国際関係に関しましては、19期までは常置委員会がございまして、そちらで所掌していたのですが、それ以上に学術会議及び我が国として海外とのお付き合いをどうすべきかということはより戦略的にやる必要があるだろうということで、在り方委員会で屋上屋を重ねるような委員会をつくるのはいかなものかという先生方もいらっしゃったのですが、最後まで国際委員会というものを屋上屋を重ねるような形ではあったのですが、その戦略を練るという必要から最後までそれを置きましようと言った人間の1人がまさかその運営を仰せつかるようなことになると思ってもよらなかったのですが、いずれにいたしましても連携会員の皆様方もおそろいになったところでございますので、停滞しております活動をできるだけ早く、しかも、起点がいつからなのかよくわからないのですが、10年以内に活動を評価するというのが総合科学技術会議との約束でございまして、起点が総合科学技術会議の報告書が出てからだとしますと、もう3年たっておりますし、新生学術会議が始まってからだったらまだ1年と、こういうような勘定もできるかと思いますが、いずれにいたしましても今期の最後には正式な活動、新生の真の学術会議としての活動が進められるような状況にぜひ皆様方が持つ

ていらっしゃるようなことのお手伝いを金澤会長のもとでさせていただきたいと思います。

微力ではございますが、できる限りのことをさせていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。(拍手)

○議長 ありがとうございます。

皆様方の力強いお言葉を大変心強くお伺いしたところでございます。

前副会長退任挨拶

○議長 それでは、続きまして、前副会長の御退任の御挨拶をいただきたいと思いますが、浅島先生はこうなってしまいましたから、最初に大垣先生、どうぞお願いいたします。

○大垣前副会長 大垣でございます。

浅島先生の言葉を使いますと非常に晴れやかな気持ちであります。

黒川前会長が私のような軽い者をなぜ副会長の一角に入れたかというのは、なってから考えたのでありますが、学術会議の新生のときに、全く白紙に、すべてをゼロにして、ゼロから考え出すという仕掛けを意識的にされたのではないかと。そのおかげで、去年の暮れから正月にかけては、30日も会議があるし、3日か4日にも出て、途中でも年がら年じゅう電話とメールがくるということで、家内から学術会議って何なのという質問を受けたような状況でありましたが、おかげさまで大変楽しくさまざまな方々と会うことができました、楽しい時間を過ごすことができました。

担当の政府との関係は、本当に私の非力のためもありますが、スタートしたばかりでなかなか体制をつくることができなかつたかと思えます。昨日の総会の議論でも車の両輪論がありましたが、それはそれとして、これから非常にうまくいくのではないかという形ができたのではないかと。車に例えないで、飛行機に例えますと、エプロンから出て、滑走路のところでエンジンを噴かしている状況ではないかと。今回のこの重厚な副会長の新しい体制で十分政府、社会とともにやっていくというか、十分な体制をつくっていけないのではないかと、陰ながら——陰ながらじゃない。一会員として御協力したいと思えます。

最後になりますが、この非常に複雑な制度改革で運営が非常に難しかったのでありますが、それに対して事務局が大変な努力をされて、事務局の方は大変遅くまで働いていらっしやいまして、その事務局の皆さんの御協力に感謝申し上げたいと思えます。

どうもありがとうございました。(拍手)

○議長 どうもありがとうございました。

それでは、続きまして、石倉前副会長、お願いいたします。

○石倉前副会長 皆さん、おはようございます。石倉洋子でございます。

思い返してみれば、今年の今ごろですね、突然副会長をやらないかと言われて、びっくりしたというのが正直なところで、私は学術会議の会員でもございませんでしたので、何をやるのかよくわからないというところから始まりました。

それで、感じたことを幾つか申し上げますと、特に学術会議というのは非常にこの仕事は名誉なことだということを本当に思いました。それは特に、私、国際担当でございましたので、国際会議とか、外の会議と外の人、ロイヤル・アカデミーとか、いろいろ我々学術会議の対応団体ですか、の方々とお目にかかる、こういう組織なんだなということを感じて、そういう意味でも非常にプライドを持って仕事をするのができて、このような機会を与えていただいた黒川先生、それから一緒にいろいろとやらせていただいた浅島先生、大垣先生には感謝申し上げたいと思います。

もう1つは、価値というのは多分今までのメンバーの方々いろいろな国際会議で活躍なさって培ってこられたことだと思いますので、その財産を壊してはいけないなということとともに、簡単に壊れるものだなということを感じました。ですから、非常にすばらしい地位にあるので、それをこれからいかに生かしていくかというのが非常に重要だなと思っております。

私は個人的には会員でもなくて、何をやっているかよくわからないところで、突然きましたので、まずやらなければならないことを非常に混乱させてしまって、皆様方には大変御迷惑をおかけして、ここにいらっしゃる土居先生などにも最初のころいろいろ言われても何を言われたのかよくわからないという感じだったのですが、やっと今になってああそうだったのかということもあります。何しろ今まで続けてきた活動を続けることと、それからピンポイントでアジア学術会議とか、持続可能、今で言えばイノベーションの会議だけを何とかやらせていただいたということなんです。

先日も国際委員会ですらちょっとことし何をやったかというレビューをやったのですけれども、やり残したことの方が圧倒的に多くて、先ほど申し上げたように、学術会議の世界での地位ということを見ると、これから国際戦略をどうやっていくかということが非常に大きな課題だと思います。それについては戦略をつくるころまではできなかったのですが、一応今までの活動がどうなっていて、国際対応団体というのはどういう状況なのか、

ファクトを集めるところはある程度できたのかなというふうに思っております。ですから、それをベースにさせていただいて、戦略を考えていただき、この名誉ある組織をさらに一歩進めるということをやっただけなのではないかと期待しています。

もう1つ、非常に心残りなところはウェブサイトに関く手がつかなかったという点ですね。英語の部分を見ていただくと、ずっと前のがまだ残っていて、何も新生学術会議は起こってないというように世界では見られている。あれはいろいろやりたいなと思ったのですが、結局ほとんど何もできず、人材とかは手当てはしたのですが、最後のところでなかなかうまくできなくて、あれは私としてもかなり恥だなと思いつつ、非常に残念に思っています。このような時代になりますと、世界への発信、一般の方への発信という意味でもウェブサイトをいかに使うかというのが非常に私は大事だと思っておりますので、そのあたり余りお役に立てなかったということは残念に思っています。

しかしながら、皆様方、ここらいらっしゃる金澤会長はもちろんですし、土居先生、それから——ちょっと名前を忘れてしまいました。浅島先生と、えーと、鈴木先生。鈴木先生は私と同じ大学ですから、忘れるなんて許されないんですけども、ちょっとど忘れしてしまって、上がっているんです、これでも。大変お世話になりましたし、このようにすばらしい、新しい執行部でやっていただけるというのは大変期待しております。

私に何ができることがあればぜひやらせていただきたいと思うとともに、皆様方に大変お世話になって、このような機会、それから何だかよくわからない人が右往左往しているのを身をもって助けていただいてありがとうございました。

中でもこの事務局の方々は本当に私のためにいろいろなことをしていただいたので、この場をかりしてお礼を申し上げたいと思います。

どうもありがとうございました。(拍手)

○議長 どうもありがとうございました。

それでは、こういう布陣でスタートすることをお許しいただきたいと思います。

そ の 他

○議長 さて、今入りましたニュースでございますが、すばらしいニュースが入ってまいりました。

黒川清前学術会議会長におかれましては、本日付で安倍総理から、内閣特別顧問に任命

されたとの情報が入ってまいりましたので、御紹介申し上げます。

総理からは、黒川先生に対して、本日付で科学的な視点からの知見、世界の科学情勢や科学技術に関する情報の提供など、科学に関する特命事項に関する内閣特別顧問をお願いしたいと。特に2025年までを視野に入れた長期の戦略指針、イノベーション25を来年5月から6月をめど取りまとめることとしており、黒川内閣特別顧問には高市イノベーション担当大臣と協力、連携し、その取りまとめに御尽力いただきたいとの要請があったということでございます。

大変重責を担われることになるわけではありますが、黒川先生、前学会議会議長だけではありませんで、現役の連携会員であることを忘れないようにしたいと思います。

以上でございます。

本日の議題はここまででありますけれども、これ以後、各部で部会を開いていただきまして、必要な場合には役員の改選を行っていただきます。

12時から幹事会を開きますので、お集まりいただきたいと思います。

御散会の前に1つだけお願いがあります。それは午後、ロバート・メイさんの後に採決をしなければいけません。そのときに定足数が極めて重要になりますので、先ほど申しましたように、スタートの時点では107名なんですね。御承知でしょう。106名が定足数でありますので、極めて危ない橋を渡っているので、ぜひお帰りにならないようお願いしたいと思います。

それでは、午前の会は終わります。ありがとうございました。

午前10時27分休憩

午後1時32分再開

〔ロバート・メイ卿特別講演（速記なし）〕

- 提1 補欠の会員候補者の承認について
- 提2 日本学術会議細則の一部を改正する決定案について
- 提3 「科学者の行動規範について（声明）」（案）について

○議長 それでは、出席者数を数えますので、着席のままお待ちいただきたいと思います。会を継続できるかどうかの境目でございますので。

数えている間にちょっと余計な話をいたしますが、実はインターネットによりますと、今のロード・メイ・オブ・オックスフォードは、おもしろいことを書いていらっしゃるんです。イグ・ノーベル賞というのを御存じでしょうか。おもしろい、とんでもないことを仕事としておやりになった方に差し上げるノーベル賞ですね。これを絶対にイギリスのサイエンティストにはやるなということをおっしゃっておられるんですね。私は半ば非常にスクエアな方かと思っておりましたが、先ほどその話を持ち出しましたら、実はそうではないと。非常にシリアスな問題であると。というのは、何だったか、ちょっとおもしろい仕事をした人のことをイグ・ノーベル賞の委員会でノミネートしましてね。その賞を差し上げたところ、イギリスのマスコミが、こんなくだらないことにサイエンティフィックの金を出しているとはけしからんと言って政府が怒られたのだそうです。ちょうどそのころ彼はサイエンティフィック・アドバイザーをやっておられたので、非常に困ってしまったということがあったのだそうでありまして、そういうマスコミといいましょうか、そういうビヘービアが意外なところに影響を及ぼすのだなということを知った次第であります。あんまり茶化して言うものではないなと思って反省しているんです。

どうですか。——もうちょっと待てということですので……。どうでしょうね。ぎりぎりかな……。

ほっといたしました。106名だそうでございます（拍手）、ありがとうございました。

最後に入ってこられた方は拍手で迎えましょう。

それでは、再開させていただきます。

提案1から3の審議、採決でございますが、まずは補欠会員候補の承認でございます。

それでは、浅島先生ですか、よろしくお願ひいたします。

○浅島副会長 それでは、昨日の提案に基づきまして御審議し、承認していただければと思います。

まず1つは、補欠の会員の候補者の承認でありまして、昨日述べたように、黒川前会長の後の会員について日比紀文先生を補欠会員としてお認めすることについていかがでしょうか。御提案申し上げます。

○議長 ありがとうございます。

御質問、御意見ございますでしょうか。

よろしいですか。

ありがとうございます。

それでは、採決を行いたいと思いますが、採決することに御異議ございませんでしょうか。

よろしいですか。

ありがとうございます。

それでは、日本学術会議法第24条第2項の規定によりまして、出席会員の多数決による規定されておりますので、日本学術会議細則第4条第1項の規定によりまして、採決は挙手により行いたいと存じます。いかがでしょうか。御異議ございませんでしょうか。

ありがとうございます。

それでは、本提案に賛成の方の挙手をお願いいたします。

[賛成者挙手]

○議長 ありがとうございます。

挙手多数と認めたいと思います。原案どおり承認されました。ありがとうございます。

○浅島副会長 どうもありがとうございました。

○議長 それでは、続きまして、提案2でございます。日本学術会議細則案です。どうぞ。

○浅島副会長 これについても昨日提案申し上げましたけれども、理由は、「数学」を「数理科学」という言葉にして、委員会名を改正前は「数学委員会」と述べていましたものを改正後は「数理科学委員会」と訂正させてもらいたいものでございます。

以上です。

○議長 ありがとうございます。

何か御質問、御意見ございますでしょうか。

よろしいですか。

ありがとうございます。

それでは、採決に移りたいと思いますが、御異議ございますでしょうか。よろしいですか。

それでは、先ほどと同様のことによりまして、採決は挙手によりたいと思いますが、御異議ございませんでしょうか。

ありがとうございます。

それでは、ただいまの第2提案であります、日本学術会議細則の案でございますが、本提案に賛成の方の挙手をお願いいたします。

[賛成者挙手]

○議長 ありがとうございます。

挙手多数と認めます。

○浅島副会長 どうもありがとうございました。

○議長 それでは、提案の3、科学者の行動規範（声明）に移りたいと思いますが、どうぞ、お願いします。

○浅島副会長 科学者の行動規範につきましては昨日述べたとおりでございますけれども、部会等で審議していただいた中でもう少し突っ込んだ方がいいということもありましたけれども、行動規範及びそれに付随する「科学者の行動規範の自律的実現を目指して」という、この2つをセットにしてお認めいただけたらと思っております。これについてもよろしいお願いいたします。

○議長 いかがでしょうか。御質問、御意見ございますでしょうか。

各部会でいろいろ御意見をいただいたということは伺っておりますし、それに対応する処置はとってあるつもりでございますが……。

よろしいでしょうか。

実は誤字脱字でございまして、お恥ずかしいことですが、事務局から説明させます。

○會田企画課長 まことに申しわけございませんが、誤字の関係で説明させていただきません。

昨日お配りしました資料5をごらんいただきまして、今回の声明文でございますが、その4ページ、「科学者の行動規範」というものの2枚目になりますが、その中で、5の「研究活動」という小見出しがついている文章がございます。その3行目、「盗用などの不正行為を成さず」というところで、「成功」の「成」となっておりますが、これは「行為」の「為」でないといけませんので、このところ、おわびして訂正させていただきます。

○議長 おわかりいただけましたでしょうか。さすがに学術会議であります。勉強させていただきました。

よろしいでしょうか。

それでは、採決に移ることに御異議ございませんでしょうか。

よろしいですか。

それでは、今度は日本学術会議法第24条第2項の規定により、出席者全員の多数決によると規定されておりますが、採決は挙手により行いたいと思います。御異議ございませんでしょうか。

よろしいですか。

ありがとうございます。

それでは、本提案に賛成の方は挙手をお願いいたします。

[賛成者挙手]

○議長 ありがとうございます。

多数の御賛同をいただいたと認めさせていただきます。

○浅島副会長 どうもありがとうございました。

○議長 どうもありがとうございました。

御苦労さまでした。

これまで声明を出しますときには大体は学術会議の会長談話という1枚紙をつけて出しておりまして、幹事会でも御承認をいただいておりますけれども、多分議論になったであろうところを一言だけ申しますと、案の中を一部修正いたしまして、専門職としてさらに加えるべき倫理など検討するべき課題は残っているという一文を入れさせていただきましたので、よろしくお願ひしたいと思います。御報告でございます。

ありがとうございました。

何か特別な御意見が特になければ、本日の予定いたしました議事はこれで終了でございます。

ますが、最後に事務から連絡事項をお願いします。

事務連絡

○會田企画課長 それでは、簡単に事務連絡をさせていただきます。

本日、総会終了後に予定どおり機能別委員会が各会議室で開催されますので、よろしくをお願いします。

また、17時30分から新会長・新副会長就任祝賀懇親会が講堂前の1階のロビーのところ、ホワイエと呼んでおりますが、そこで開催されますので、御参加いただける方はよろしくをお願いいたします。

また、明日の予定でございますが、10時から各委員会が開催されます。お配りしております資料の参考の3というところをごらんいただきたいと思っております。

最後に1つお願いがございますが、講堂入り口横のビジョンボックスに入れてある資料につきましてはお持ち帰りいただくようお願いいたします。

以上でございます。

○議長 どうもありがとうございました。

本日の会議はこれで終了いたします。

午後2時52分閉会